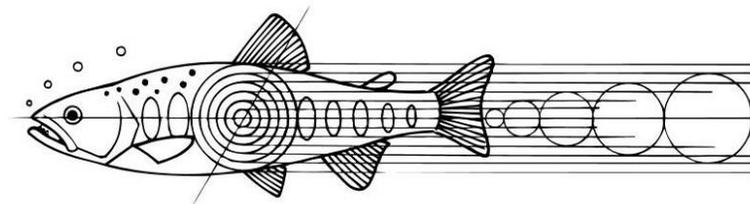


# news

長良川市民学習会ニュース



河口堰・木曾三川・伊勢湾を多度山より眺望（撮影：2013/12/29 粕谷志郎）



## 特集 河口堰閉鎖 25年

No.32

2020年7月6日

With Corona となった長良川河口堰 25周年 粕谷志郎	1
変わりゆく長良川の魚類 向井貴彦	4
「岐阜県の魚類（第二版）」の発刊を喜ぶ 川那部浩哉	9
サツキマス漁師・大橋修さんのお話を聞く	11
特集「河口堰閉鎖 25年に思う」	13~26
長良川河口堰閉鎖からの足跡 25年の年表	29

今年 2020 年は、長良川河口堰が閉鎖されて 25 年となる年です。長良川市民学習会は河口堰の開門調査早期実現の足がかりとなる年となるよう活動を準備しておりましたが、コロナウイルスの感染拡大により 2/29 シンポジウム「よみがえれ長良川 2020」や環境観察会など様々な計画を延期せざるを得なくなりました。

しかし、長良川環境をめぐる状況は悪化するばかりで、座して過ごせる状況にありません。そこで当面できることとして、あらためて「河口堰開門調査実現」の声を喚起する決意で、「ゲート閉鎖の日」である 7 月 6 日に当会ニュースの特別号を発行することにしました。「よみがえれ長良川！」の熱いメッセージをお届けします。

## 目次

With Corona となった長良川河口堰 25 周年 粕谷志郎	・・・1
活動報告・河口堰開門と長良川市民学習会 武藤仁	・・・3
<b>●変わりゆく長良川の魚類</b> 向井貴彦	・・・4
向井貴彦編著『岐阜県の魚類（第二版）』の発刊を喜ぶ 川那部浩哉	・・・9
サツキマス漁師・大橋修さんのお話を聞く	・・・11
<b>●特集「河口堰閉鎖 25 年に思う」</b>	
「河口堰運用 25 年に思う」 亀井浩次	・・・13
私の青春と河口堰閉鎖 25 年 渡辺泰	・・・14
長良川河口堰建設反対運動で出会ったもの 堀敏弘	・・・15
河口堰開門に向けて ― 開門しても農業塩害は生じない ― 在間正史	・・・16
建造の堰改めてご覧あれ 高橋恒美	・・・17
河口堰閉鎖 25 年に思う 千藤克彦	・・・18
あれから 25 年 中川敦詞	・・・19
河口堰閉鎖 25 年に思う 近藤ゆり子	・・・20
国会請願行動・30 年―毎回上京提出に参加して 加藤守	・・・21
愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会 富樫幸一	・・・22
「河口堰」反対運動と「導水路」中止裁判 加藤伸久	・・・23
「木曾川水系連絡導水路」は「長良川河口堰」を閉め続ける 榎 粕谷豊樹	・・・24
河口堰ができて 25 年。早いものです。 岡久米子	・・・25
公益とは？ 田中万寿	・・・26
<b>●事務局より</b> ・書籍紹介「うみはいのち」、「ぎょぶる-2020 年第 9 号」	・・・27
・団体紹介「生物多様性 10 年市民ネットワーク」 三石朱美	・・・28
<b>●長良川河口堰閉鎖からの足跡 25 年の年表</b>	・・・29

# With Corona となった長良川河口堰 25 周年

長良川市民学習会代表 粕谷志郎

皆様、コロナ禍の中、お元気におられたでしょうか。飛沫や接触で感染するウイルス疾患ですが、言葉と手を使う、人が人たる行為が感染拡大の最大の原因となっており、深く人類に根付いてしまった感があります。感染者の8割が軽症か無症状であることから、直ぐそこでウイルスが同居している様子がうかがえます。安倍首相も喧伝した治療薬と、すでに認可された薬剤も、特効薬たる薬効を具体的データは示し得ていません。有名人も使用して治ったとも伝えられますが、使わなくても治った可能性を否定できないこととなります。新型コロナウイルスはインフルエンザウイルスなどと同じ、RNA ウィルスに属し、遺伝情報のコピーミスが起こりやすい特徴があります。直ぐに変異ウイルスが発生し、その中には強い毒性を獲得するものが発生する可能性も高くなります。現在、唯一ウイルスから遠ざかる手段は人と人の距離を取る、ソーシャルディスタンスです。飛沫は比較的大きな粒子で、空中を漂い続けることは出来ません。精々1~2m で落下することが分かっています。この距離をとり続けることが、感染、感染拡大、変異株の大流行のすべてを予防する手段といえます。もちろん、飛沫で汚染された物に触り、顔に運ぶことも厳禁となります。私たちのよみがえれ長良川関連の活動も2月以来休止となっています。ソーシャルディスタンスのもと、再開を模索しているところです。

## 長良川河口堰 25 年の印象に残った 5 つの出来事

### 1) 予測通り堰下流はヘドロの 海となった

当時、建設省モニタリング委員会の委員をされていた奥田節夫氏は芦田川河口堰等の経過を踏まえて、堰下流の水流のデータを詳細に取るように指示されていたようです。長良川河口堰調査報告書にそれが公表されています。1994年10月に行われた試験湛水(ゲート閉鎖)とその前後のゲート開放時の変化は劇的と言えます。ゲート閉鎖により、表層の淡水から川底の海水まで塩分濃度の異なる層が形成されます。水流は上層が下流へ向かいます。ゲートを越えて川の水が流れ下っているからです。これに少し下層の海水が巻き込まれて下流へ流れます。驚いたことに、川底では下流から上流に向かう海水の流れが生じています。河口部では小潮時の上げ潮には川底で上流に向かう海水の流れが見られますが、引き潮では上層でも川底でも流れは海に向かいます。ところが、ゲートを閉鎖していると上げ潮、引き潮にかかわらず常時川底では逆流が発生したままとなります。こうした変化は河川によって運ばれてきた有機物が沈殿し、川底で逆流に乗り堰下流で堆積することを意味します。塩分濃度の異なる層が形成されると空気中の酸素は層をまたいで川底に到達することは出来ず、有機物はヘドロと化します。河口堰運用後1年も経過せずにヘドロが堆積しました。当初はヘドロの中にヤマトシジミの死骸が沢山見られました、酸素も無いヘドロの中でシジミは生存できません。しかし、年と共にシジミの死骸も見られなくなりました。ヘドロがどんだんたまり、当初のシジミの死骸は採泥器では届かない深さになってしまったからです。これらの変化はどんな対策をしても戻せません。河口堰の開放しか手段はありません。

### 2) 天野礼子氏を中心とした運動は全国に広がる

天野礼子氏を中心となって、1988年、河口堰着工の年に「長良川河口堰建設に反対する会」が立ち上がりました。師の開高健氏の影響もあり、全国の川を愛する釣り人、カヌーイストなどが参加しました。さらに、無駄な公共事業に反対する人々も参集し、国会活動を含む、全国的な運動が形成されました。こうした流れの中で当時

の建設省と直接対話する円卓会議が持たれました。私も、これに参加し、川底にヘドロが堆積し、シジミが死滅する仕組みを説明しました。しかし、この円卓会議は運用に向けたガス抜きのように、野坂浩賢建設大臣の最終決断で長良川河口堰の運用が開始されました。その後も、反対運動の盛り上がりを背景に、当時の亀井静香建設大臣に直接訴える機会を得ました。しかし、建設省役人は、彼らの都合の良いデータを大臣に説明し、そのまま時間切れとなった事を苦々しく思い出します。こうした全国的運動が河川法の改正につながったことは、一般に認められる事実となっています。

### 3) 河口堰は吉野川で止まった

河口堰そのものの息の根を止めたのは 0123(2000 年 1 月 23 日)の吉野川可動堰の賛否を問う住民投票です。圧倒的大差で反対の意志が示されました。当初はこの計画に多くの住民が賛成もしくは容認の態度を示していました。徳島県の自治体関係者などは長良川に招かれ、河口堰があるにもかかわらず、美しく、シジミやアユは捕れていることを見させられました。住民の態度を変えたのは長良川の実態を正しく伝えた事にあります。関係者が連れて行かれた所は、渚プランと言って、砂を入れ、シジミを放流したほんの狭い一角です。私も何度も徳島に入り、講演や街頭宣伝、長良川の実態を知らせるビラ配りを行いました。吉野川で河口堰が止まった後、日本中何処にも河口堰は計画されていません。世界的にも河口堰(防潮堤)があるのは日本、韓国、オランダの 3 カ国のみ、日本以外は、これを撤去ないしは、潮止め機能の緩和へと進んでいます。この潮流は消せません。この先に見えるのは長良川河口堰のゲート開放です。

### 4) 民主党政権で木曾川水系連絡導水路は凍結された

2009 年 8 月に民主党政権が発足し、11 月に国交大臣が幾つかのダム計画と共に木曾川水系連絡導水路計画を凍結しました。それに先立ち、2007 年 12 月に私たちの「長良川市民学習会」が発足していました。徳山ダムに貯めた水を導水路で木曾川に流そうという計画で、しかも、途中、長良川にも流し、下流で木曾川へ返そうという、長良川を水路にしようという案が、唐突に出されました。これに疑問を持つ人達によって自然発生的に運動が出来上がりました。民主党政権が倒れた今も導水路の凍結は解除されていません。

### 5) 当事者(水利権を持つ)の愛知県が開門調査を提案

2011 年に河村たかし、大村秀章両氏による名古屋市長、愛知県知事のダブル当選があり、二人は当選しました。この時の共同綱領の中に長良川河口堰の開門調査が掲げられていました。愛知県に長良川河口堰検証専門委員会が作られ、治水、利水、環境に関する検証がなされました。私も委員として参加しました。河口堰賛成の委員の辞任というドタバタもありましたが、最終的に最低 5 年の開門調査の結論にこぎつけることが出来ました。歴史が変わり始めた大きな転向点ではないでしょうか。しかし、その他の当事者となる岐阜県、三重県は「塩害が起こる」と消極的態度を崩しません。マウンドという川底の高い箇所があり、そこで塩水が止まっていたとする考えです。撤去した今、塩水が遡上し、塩害を引き起こすというものです。しかし、この箇所の横断面図を見ますと、ダムのように川底が高くなっているわけではなく、必ず低い所があり、これを連続させてゆくと「みおすじ」という川底にある水路が浮かび上がります。塩水はそこを通過してやすやすと上流に上っていました。マウンドで塩水遡上が止められていなかったのであれば、撤去しても、塩水遡上に何の影響も無いのは自明です。かつて塩害が無かったと同じ理由で、河口堰を開放しても塩害は起こりません。農業用水を取水しない秋から春にかけてゲートを開放すれば、塩害を起こすことなく、塩水遡上の調査をすることが出来ます。誰にも損害を与えない、万人納得の提案ではないでしょうか。これに同意できない、真実をひた隠す人たちによって、戦々恐々と維持されているのが、今の長良川河口堰です。



## 活動報告・河口堰開門と長良川市民学習会

長良川市民学習会 事務局長 武藤 仁

前回ニュース 31 号 (2/14) でお知らせしました 2 月 29 日のシンポジウム「よみがえれ長良川 2020」は、コロナウイルスの感染が拡大するもとの延期と判断させていただきました。今年 2020 年は長良川河口堰のゲートが降ろされて 25 年になる年です。四半世紀、海と分断された長良川では大きな環境悪化が起きていますが、ちょっと見ただけではその変わりようは分かりません。本流にダムを持たない長良川は上中流では流れが止まること無く「清流」の面影を持ちながら流れ下っているからです。「河口堰」を知らない世代やダムがあるのが当たり前の他の川を見てきた人には長良川の劣化が見えません。長良川の劣化・変貌を一番よく知っているのは生死を 100%川に依存する魚類やそこで暮らす漁師さんたちです。予定したシンポジウムは、そこからの視線で長良川をもう一度考えてみよう企画したものでした。

この 25 年間残念ながら長良川に関わる行政は河口堰に関わる問題を隠し、不都合な真実には目を向けない姿勢をとり続けてきました。とりわけこの数年は、経済・観光優先の姿勢が露骨になってきています。鮎の大量放流で、「清流の国」ではなく「放流の国」にしようとしています。また、「洪水対策」の名で岸辺の緑はたくさんの重機で「見事に！」剥ぎ取られ、生きものや景観保護には全く配慮のない工事が強行されています。いま「長良川が長良川でなくなる」危機的な状況にあります。

コロナ禍のもと多くの市民の参加によるシンポジウムや集会開催が難しいなかで、少しでもこの長良川の現実を考えていただくとともに、これまでの活動を振り返り、改めて、「よみがえれ長良川！河口堰の開門調査早期実現！」を訴えさせていただくためにニュースの特集号を発行することにしました。

### 河口堰開門と長良川市民学習会

徳山ダム完成を間近に 2007 年導水路計画が決定されました。長良川市民学習会は、「長良川に徳山ダムの水はいらない！」と市民に警鐘乱打しその年の暮れに発足しました。この呼びかけは地元岐阜市民の「長良川を守れ！」の思いをベースにひろがり、それまでお互いに繋がりが少なかった徳山ダム反対運動グループ、河口堰反対運動グループのみなさんが一堂に会した運動となりました。呼びかけた私たちも初めてお会いする人が多く驚きました。市民世論も一気に高まり、差し迫った着工はくい止めることができました（「凍結」状態が続き、まだ「事業中止」にはできていません）。

2010 年に第 30 回全国豊かな海づくり大会が長良川を舞台に開催されることになりました。これは河口堰問題に触れないものでした。そこで私たちは豊かな川から豊かな海へ「長良川河口堰のゲートを上げよ！」をスローガンにした市民による「豊かな海づくり大会」を呼びかけ、長良川国際会議場において開催しました。この市民による運動は世論を広げ、ここにおいて初めて「河口堰開門」のスローガンがマスコミでも多く取り上げられるようになりました。当時の岐阜市長も記者会見で「開門試験」を否定できない状況でした。

同年秋に名古屋で開催された生物多様性 COP10 でも私たちは長良川河口堰開門をアピールしました。国内外の NGO との交流も深め、韓国 4 大河川事業の環境破壊とのたたかいとも出会うことができました。

COP10 での河口堰開門のアピールは愛知目標を通して愛知県の「長良川河口堰検証」や「開門調査」の提案に発展しました。

COP10 での韓国 NGO との交流は、数度の「開門」国際シンポジウムの開催や釜山市当局との情報交換にも発展しています。洛東江河口堰では昨年「開門調査」が始まり全面開放に向け進んでいます。

長良川でも頑張りましょう！ 一日でも早く開門調査を実現し、長良川をよみがえらせましょう。

## 変わりゆく長良川の魚類 「岐阜県の魚類 第二版」の出版とその後の変化

岐阜大学地域科学部 向井貴彦

### 「岐阜県の魚類 第二版」について

岐阜県にはどんな魚がいるのか？ この疑問に答えられるように、そしてまた様々な魚が身近な環境にいることを知ってもらえるようにと、岐阜県産の全魚種を掲載した「岐阜県の魚類」を出版したのが2017年の夏でした。そして、2019年末に「岐阜県の魚類」の初版に新情報を加えて、さらに多くの写真を差替え・追加した第二版を出版しました。意外に早く改訂版を出すことになった理由の一つは、大変ありがたいことに初版が売り切れてしまったためです。やはり、欲しい、読みたい、という方がいてくれるのに入手できないのを放置するわけにはいきません。そしてもう一つの理由が、2017年から2019年までのほんの2年間で淡水魚の分類学的研究が進んだことや、新たに野外で見つかった外来種などの情報を取り入れたかったということです。

### 「淡水魚の分類」と「自然を見る目」

分類学といってもさまざまですが、身近な淡水魚に「新種」として名前が付くと、一般の人にもわかりやすく、インパクトがとても大きいです。2018年から2019年は日本の淡水魚の新種記載ラッシュで、多くの人が知っているカマツカやナマズにも新種が見つかって名前が付けました。カマツカは岐阜では「すなくじ」と呼ばれることが多い魚で、「岐阜県の魚類」初版ではカマツカAとカマツカBとして載せていましたが、2019年に出た論文でカマツカBが新種「ナガレカマツカ」として記載されました(写真1)。したがって、長良川には「カマツカ」と「ナガレカマツカ」がいることになりませんが、ナガレカマツカは川底が砂よりも石のところが多いようです。ナマズも同様に初版ではナマズとナマズ属の1種として載せていたのですが、2018年に「ナマズ」と「タニガワナマズ」として分類されました。こちらも長良川に両方いるようで、かつて関市で後藤宮子さんが登り落ちで捕った標本の中にもタニガワナマズは含まれていたようです。川魚の好きな人はカマツカもナマズも食べたことがあるかもしれませんが、より上流の水のきれいなところにいるナガレカマツカやタニガワナマズはまた違った味かもしれません。

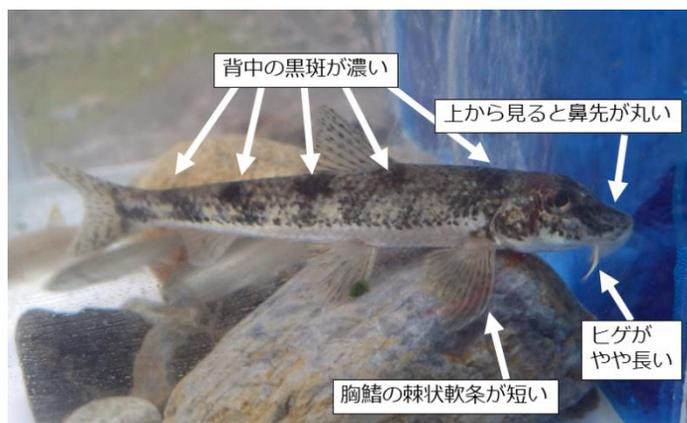


写真1 2014年9月6日に美並町粥川で行った長良川DAYで捕れたナガレカマツカ。当時は判別できなかったが、区別点があったので写真で同定できるようになった。

このように身近な魚の分類が進むのは、自然そのものが変化したわけではなく、私たちの自然を見る目が、より正確になったということです。人間、年齢を重ねると老眼が進んで、体も硬くなってきますが(私もだいぶ老眼が進んできました 笑)、同時に思考も硬くなりがちです。自然観察などの場で、近年分類された種類について「そんな細かく分けても仕方ない」などと言って、御自分が憶えた40年前、50年前の分類に固執する方を見ることがありますが、今の子供たちは新しい図鑑を見て、細かく自然を見ることのできる精度の良い目を持っています。精度の良い目で自然を見れば、これまで分からなかったことが見えてきます。特に、川の環境を考えた時に、川魚を細かく分類せずにざっくりと「ナマズ」「カマツカ」「ヨシノボリ」といった程度に分けていると、上流から下流まで同じ種類が広くいて、ダムを造ろうが、コン

クリーンで多少川を固めようが、何の変化もないように見えるかもしれません。しかし、ナマズ、タニガワナマズ、カマツカ、ナガレカマツカ、カワヨシノボリ、シマヨシノボリ、トウヨシノボリ、オオヨシノボリ、トウカイヨシノボリといった種類に分けて見れば、川の環境がそれまで以上に多様に見えるし、河川工事などの影響も出てくるでしょう。そう考えると、図鑑を作る大人の責任は重大です。これからの時代を生きる子供や若者のためには、適当な分類で大まかに魚を載せた図鑑ではなく、分けられる種類はちゃんと分けて、細かく正確な本を作らなければいけません。岐阜県の魚類を改訂したのは、そうした責任を果たすためでもあります。

### 新たな脅威コクチバスの広がり

私たちの自然を見る目とは別に、自然そのものを変えてしまうものの一つが外来種です。特にブラックバス的一种であるコクチバスの増加が大変危惧されます。ブラックバスと呼ばれるのはオオクチバス属の総称で、日本にはオオクチバス（亜種としてのノーザンバスとフロリダバスを含む）とコクチバスが持ち込まれて増加しています。オオクチバスはいわゆる普通のブラックバスで、流れのある環境では繁殖しないために、アユなどの流水性の魚には影響が少ないようです（ただし、溜池では在来種を絶滅させることが多い）。その一方でコクチバスは流れのある環境でも産卵・繁殖し、オオクチバス以上に肉食性に偏っているため、オオクチバスには影響されなかったアユなどの遊泳魚にも影響がでることになります。

岐阜県ではコクチバスが山県市の伊自良湖に定着していたことがありますが、2006年に堤体工事のための水抜きで根絶されました。その後は、飛騨地方のいくつかのダム湖に定着しつつも、長良川などには定着していなかったようですが、現在は揖斐川水系で大量に繁殖しています。揖斐川や根尾川から引かれた農業用水は犀川などを通じて長良川につながっていますが、2018年にはそうした用水でコクチバスが見つかりました。2019年には揖斐川町から大垣市までの広い範囲の揖斐川で多数のコクチバスが釣れることが大垣市の市民団体サツキマスレズレクションによって確認されています。もはや長良川に侵入して増加するのは時間の問題で、岐阜高校自然科学部が行った環境DNAメタバーコーディングによる調査では、長良川下流ですでにコクチバスのDNAが検出されているようです。

コクチバスの定着と増加によって、アユ自体はそれほど減らないかもしれません（減ってもそれ以上に大量に放流するでしょう）。しかし、サツキマスを狙ってルアーを投げる場所にコクチバスが増えればどうなるでしょうか。コクチバスのたくさんいる場所に友釣りのおとりアユを泳がせたらどうなるでしょうか。アユもサツキマスも、それ自体は個体数が減らなくても、釣りをする文化には大きな影響があるかもしれません。



写真86-1 下呂市で撮影。2019年8月27日。(向井)

### 86. コクチバス (外来種: 北米原産)

*Micropterus dolomieu dolomieu* Lacepede, 1802

**【特徴】** 全長40cm程度。北米原産の外来種。特定外来生物であり、飼育、販売、輸送、放流などが禁止されている。オオクチバスは第一背鰭と第二背鰭が明瞭に分かれているが、コクチバスは第一背鰭から第二背鰭へと連続的につながっている。幼魚は全体に細かな斑紋がある、成魚になるとオリープ色を帯び、明瞭な横帯(虎縞)を現すことがある。湖沼、溜池だけでなく、流れのある河川でも繁殖できる。小型魚類、甲殻類、水生昆虫などを捕食し、在来生態系に大きな影響を与える。

岐阜県でも、いくつかのダム湖や河川に定着し、広がりがつある。

**【県内分布】** 中津川市(2004年に駆除)、山県市(2006年に駆除)、高山市、白川村、下呂市、恵那市、本巣市、大垣市。

**【特記事項】** 特定外来生物、緊急対策外来種。

**写真2** 「岐阜県の魚類 第二版」のコクチバスのページ。初版よりも県内分布が詳しくなっているが、すでにこのページに記載されている以外の市町にも分布が広がっている。

コクチバス自体は以前から県内で確認されていたために「岐阜県の魚類 第二版」で新たに掲載というわけではないのですが、分布などの記述は大幅に変えています（写真 2）。初版と第二版では、分類の変更や新たに見つかった外来種などの追加だけでなく、多数の写真を追加や差替えし、こうした個々の魚種の情報も更新し、なるべく広く役に立つようにしています。

## 近年の著しい水辺の改変

「岐阜県の魚類」は、あくまで図鑑として作成したため、さまざまな河川環境の変化を個別に載せているわけではありません。しかし、図鑑を作成するためにさまざまな場所を見ることで、多くの残念な現場を見ることになります。

近年目立つものの一つは、米作から畑作への転換、圃場整備や道路整備などによる水田の変化です。水田は田植えの時期に水を張ることで湿地としての環境が維持されていました。その結果、フナ、ドジョウ、ナマズ、メダカなどの多くの魚類や、ヘビ、カエルといった両生類・爬虫類、サギなどの鳥、多様な水棲昆虫が里地・里山にたくさん見られたわけですが、麦作などに転換すると湿地ではなくなるためにそれらの生物がいなくなります。いろいろな場所に残っていた素掘りの水路なども、コンクリートのU字溝に変えられたり、あるいは埋められて道路にされています（写真 3, 4）。「長良川の魚が少なくなった」という言葉をよく耳にしますが、長良川に住む魚は、長良川本流だけに住むわけではなく、周辺の支流や水田地帯で繁殖し、そこから長良川に戻る魚も多かったはずで、広大な水田地帯を魚が繁殖できない形に作り替えていけば、長良川の魚が減るのも当然でしょう。

また、長良川にも一昨年度、昨年度と、重機があちこちに入って淵を埋めたり河川敷を掘り返しているのを見た人も多いと思います。2018 年度に鶺鴒大橋下流で長良川を大きく掘り返して淵を埋めていた様子を見た時は、なぜこんな無意味なことをするの



写真 3 長良川水系ではないが、垂井町に残されていた素掘り水路。この辺りはコウノトリが飛来するほど良い環境だった。（2015 年 9 月 4 日撮影）



写真 4 写真 3 の水路があった場所。素掘り水路は道路になった。水田も麦畑になっている。（2020 年 5 月 8 日撮影）



写真 5 岐阜市鶺鴒大橋下流の長良川。大きな淵になっていた場所（赤囲い）が完全に埋められている。（2019 年 2 月 16 日撮影）

かと思いましたが（写真 5）。長良川市民学習会ニュース No.29 と 30 でもそのことは書かれていますが、鶺鴒大橋下流の工事は鶺鴒のためということになっています。しかし、北東から流れてきた長良川が金華山の硬い岩盤に当たればそこに深い淵ができるのは当然です。鶺鴒舟を行き来させるのに不便だからと淵を埋めて流路を造成したようですが、深い淵は魚の生息環境として重要で、夜間にアユが休む場所にもなります。鶺鴒はアユ漁なのに、アユの生息場を無くしてどうするのでしょうか。また、多くの工事が冬期に行われます。予算執行の問題やアユ漁の時期を避けるということかと思いますが、冬季に河床に潜り込んで越冬す

るハゼ類やアジメドジョウなどの魚類には大きなダメージがあるでしょう。

昨年度多くの場所で見かけた河川敷の掘削（写真6）や、伊自良川の河畔林の皆伐（写真7）などは洪水時の流下能力の確保のためのようですが、自然環境への配慮があるようには見えません。長良川の本流については、川の中をいじる工事は行われていなかったようですが、様々な場所で河川敷の砂礫を広く除去していました。いずれ何度か大きな台風が来れば元に戻るかもしれませんが、河川敷には、河川敷に適応した在来の植物があり、同様に適応したカワラバッタのような昆虫もいます。ダムのある河川では河川の流量が安定してしまうことで川原が攪乱されず、外来植物などが繁茂してしまうために全国的には石の川原が減少しており、そうした植物や昆虫も減少しているようです。特にカワラバッタの減少は著しいようです。そんな中、長良川にはカワラバッタがまだ残っているとされていましたが、川原の砂中に卵が産みこまれて越冬するため、冬に広範囲で川原の砂礫を撤去してしまえば大きな影響があるでしょう。

鵜飼大橋の右岸上流側の竹林広場公園も、以前は市民団体が管理しながら利用しており、5月下旬の深夜には無数のヒメボタルが明滅するのを多くの人が楽しんでいました。しかし、重機で多くの部分が取り払われ、残った竹林も大半はスカスカの状態になりました。皆伐は免れたようですが、昨年まで多くの人が見に来ていた部分の大半はヒメボタルがほとんどいない状態でした。昼間の景観も荒れ果てています（写真8）。

こうした環境変化は最近になって急速に進められており、その結果はいずれ明らかになってくるでしょう。

### 動植物が絶滅していくのはこれから

私では日本の自然保護運動の歴史をまとめるには力不足ですが、それでも何十年も自然保護に関心を持ってきて思うところがあります。私が社会に出る前の1970年代、1980年代には自然環境を守る法制度も何も



写真6 関市千疋大橋上流。河川敷の砂礫を広く取り去っている。（2020年3月3日撮影）



写真7 岐阜市繰舟橋下流の伊自良川。川面に木陰を落とし、根元が魚の隠れ家となり、樹上はサギなどの営巣地となっていた河畔林が徹底的に伐採され、除去されている。（2020年3月21日撮影）



写真8 岐阜市鵜飼大橋右岸上流側の竹林広場公園。本来の林床は竹の枯れ葉が積もっていたが、竹の密度が減って草本で覆われたため、この環境ではヒメボタルは生息できない。

なかったのが、1997年には環境アセスメントが法制度化され、同年の河川法改正では河川管理における自然環境への配慮が入れられました。さらに、種の保存法、外来生物法、生物多様性基本法といったように、自然保護の法制度は充実してきました。これらは、長年にわたって自然豊かな環境を守って闘ってきた方々のおかげだと思っています。こうした法制度ができる以前に、高度経済成長やバブル経済を経て、生き物の豊富な水辺環境の莫大な面積が失われたものの、その後の1990年代から2000年代には開発が鈍化し、保全の機運も高くなっていました。そのため、1990年代以降にレッドデータブックに載せられた多くの絶滅危惧種が、実際には絶滅することなく何十年と命脈を保つことができました。

しかし、近年、再び激しい開発が始まりました。レッドデータブックの絶滅危惧種たちは、決してその生息環境が増加したわけではありません。近年の開発は、ピンポイントで残る絶滅危惧種の生息地を破壊していきます。開発されなくても侵略的外来種が次々と増えていきます。このままでは各地に点在する絶滅危惧種の生息地が順次失われていくでしょう。20世紀には「生息地の減少」だったのが、これから数十年の間に「絶滅」となっていくのではないかと、私は危惧しています。

### どうすれば……

こうした方向性を変えるためには、根本的には多くの人に自然の動植物への関心を持ってもらうしかありません。そのためには、少しでも多くの方が手に取ってくれるような本を作るのが（微力ではあっても）大事なことではないかと思っています。また、生物多様性基本法などの法律によって、行政も自然環境を保全しなければならないことになっています。

しかし、これまで述べたような開発的事業を行っているのは行政であり、市民の声が届いていないのかもしれませんが。岐阜市の場合は、2017年までは岐阜市版レッドリストなどを作り、生物多様性地域戦略を作り、研究者などとの協働を広げるような方向で施策が進められてきたのですが（2019年春に出来た岐阜市史現代Ⅱを見ていただければ詳しく書かれています）、2018年度に市長が変わり、自然環境課の担当者が異動で変わり、それまでの自然環境施策を全否定するように方針が変わりました。岐阜市に卡ろうじて残っていた絶滅危惧種のウシモツゴの保全は一切しない、わずかしか残っていない絶滅危惧種の保全は意味が無いから（条例指定種以外は）しない、現在の岐阜市レッドリストは使いにくいので、使いやすいものに改訂する、などなど。特にレッドリストについては、アユが準絶滅危惧として掲載されたことで県議員などともめたこともあり、なんとかしたいのかもしれませんが。あるいは絶滅危惧種がたくさん載っていると保全しろと言われるので、そうした面で「使いにくい」ということなのでしょうか。

いずれにしても、あまりにも極端で不合理な施策転換を「これが岐阜市の考えです」と関連する委員に上意下達に押し付けてきたため、岐阜市自然環境保全推進委員会や、その中の保全対象種専門部会といった場で私が反対意見を述べて、もう少しちゃんと議論をして方針を決めるべきと強く主張したところ、翌年度に議論を持ち越すことにした上で、私を翌年度の委員や部会員から全て外して検討するようになりました。また、レッドリストの改訂についても私に全く関わらせないようになっています。現在の環境保全課課長が4月に私に電話で語ったことによると、これは「民主的な手順で何も問題ない」のだそうです。

私は一市民として、あまりにも異常な岐阜市の対応に戸惑うばかりであり、岐阜市政は民主的な社会からほど遠い状態になってしまったと思わずにいられません。

こうした世の中で、どうすれば少しでも自然を守っていけるのか、大変悩ましいものです。

\* 「岐阜県の魚類」（初版）を出版されるまでの経過についての講演の記録が長良川市民学習会HP <http://dousui.org/news> バックナンバー25号に掲載されています。是非ご覧ください。

## 向井貴彦編著『岐阜県の魚類（第二版）』の発刊を喜ぶ

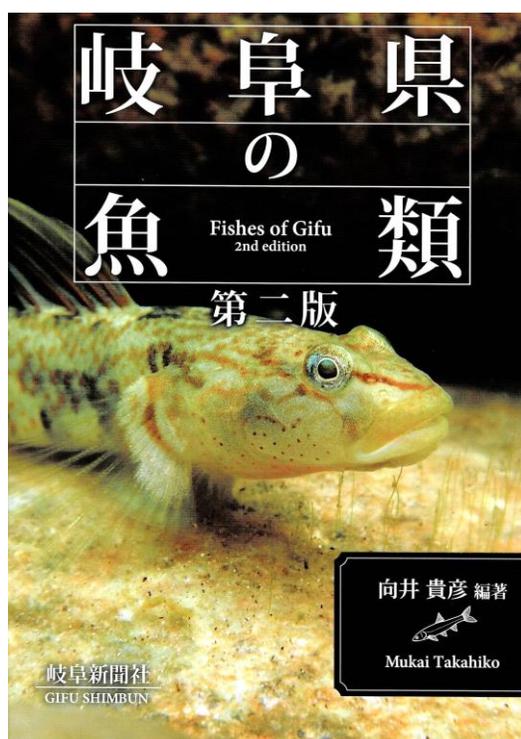
川那部 浩哉

たいへんな本が出たものだ。岐阜県内の野外で見られた記録のある淡水魚 113 種のすべてについて、最低 1 枚の写真と、[特徴]・[県内分布]についての説明があり、その前に「岐阜県の河川と環境」の解説、そして 23 の「コラム」、さらに終わりには、「魚の妖怪図鑑」なるものまで付いている。そして写真撮影のほとんどと、コラムの一部を除いた説明文はすべて、向井貴彦さんの手になるもの。この書には、既存の図鑑にはほとんど載っていない淡水魚、この改訂版発刊の 2019 年末の時点までに報告された新しい種なども、多数入っている。また、外来魚については、繁殖などが確認されていないものも含め、「飼育者が持て余して捨てた」と考えられるものもまた、たくさん記されている。とにかく岐阜県は、向井さんによれば、琵琶湖のある滋賀県をも抜いて、日本列島随一の種数を誇る都道府県なのだ。

前書きには、「各種についての一般的な情報は既存の図鑑を見ればわかるため、なるべく本書では岐阜県におけるローカルな情報を重視した」とある。淡水魚はとくに、「かたち」・「はたらき」・「くらし」のすべてにわたって、いろいろな地方でその違いは大きく、また、それは生物・非生物環境によっても大きく変わることを、以前から強調し続け、それぞれの地域における実情を、多くの方々に調べて頂くことを念願してきた私にとっては、これはまことに喜ばしい限りである。その点向井さんに、先ずは大いなる敬意を表したい。

この本の発行所である岐阜新聞社については、ある思い出がある。ほぼ 30 年前の 1989 年に、『岐阜新聞』に 108 回にわたって連載された「ふるさと・ぎふの淡水魚」のことである。これが単行本になるとの噂も、連載が終わるころにはあったように思う。これは、今回の本とは正反対に、イwana・ハリヨ・ネコギギ・アユ・サツキマス・アジメドジョウ、それに、コイ科の仲間を一括したものと、合計 7 つの項目だけについて書かれたものだった。そして各項目の担当者には、中野繁さん・森誠一さん・駒田格致さん・本荘鉄夫さん・後藤宮子さん・中島経夫さん、それに徳田幸憲さんという、いずれも岐阜県に極めて縁の深い人びとばかりが選ばれていた。私はそのとき、「岐阜県の淡水魚は、数百万年から一千万年もの歴史の中で作りあげられてきたものです。極めて重要な文化財」といっても過言ではありません。しかし、すべての著者が指摘しているように、岐阜県の淡水魚もまた、いまやさまざまな危機に瀕しています。森林の過度な伐採、無計画な宅地の造成、湧水の枯渇、河川<改修>という名の破壊、なかでも川の直線化と護岸建設、わんどの消滅、井堰の建設、家庭・工場・農地・ゴルフ場などからの排水による水質の悪化、増やせば良いというむちゃくちゃな魚類の放流。挙げれば、きりがありません。現在建設中の長良川河口堰は、かろうじて残った岐阜県の淡水魚の宝庫を、根本から覆してしまうものになるのではないかと。多くの人々からいろいろな点にかんして懸念が表明されています」と、記そうとしたことがある。脂の乗りきった岐阜大学の向井さんが編集・執筆したこの『岐阜県の淡水魚』を、出版事情の必ずしも良くないと言われるこの時期に出された岐阜新聞社にも、改めて敬意を表したい所以である。

しかし、気になる点もないわけではない。各種の[特徴]の項にある説明には、遺伝的変異の情報以外には、例えば、もっとも違いが大きいと思われる生態などについても、それは少なくとも「あからさま」には



書かれていない。また、「岐阜県におけるローカルな情報」なるものが、他の地域で見られ、あるいはすでに報告されている知見と、どこが同じで、どの点がどう違うのかも、全くといってよいほど記されていない。これはどうしてなのだろうか。いささか気になるところだ。

一つだけ例を挙げよう。ハリヨは、岐阜県南東部と滋賀県北東部の平野の湧水池とその下流を中心に、現在も分布する種である。この2つの分布域では、形態にも生態にもかなり判然とした違いがある。既刊のある図鑑によれば、例えば体長は、岐阜県側のものがかなり小さいし、その巣は、岐阜県側では浅くて緩やかな流れの開けたところに、滋賀県側では、深くて速い流れの藻場の近くに作られる。また、巣作りの行動なども、岐阜県側のものに比べて、滋賀県側のもは臆病だという。このような点は、今回の書でも、やはり触れたほうが良かったのではあるまいか。そうすれば読者はこのハリヨに、独特の形質をもつ岐阜県の魚として、いっそう親しみを持てるような気がする。そう言えば、[県内分布]の記載はあっても、それ以外の地域の分布については、外来種の原因域を除いて、どの種についてもいっさい記されていない。「身の回りの自然を見て」感動するためには、他地域と比べた「ローカルな情報」の載っているほうが、良かったように思う。

この本のもっとも優れた点の一つに、情報の極めて新しいということがある。初版の発行が2017年7月12日で、この第二版のそれが2019年12月3日、すなわちその間、2年4か月と21日しか経っていない。そのあいだに初版は完売したというのだから、いかにこの書の待ち望まれていたかが、良く判るというものだ。精力的な向井さんのことだから、すでに第三版への準備も始まって、いや、もはや着々と進んでいることだろう。そこで、向井さんと岐阜新聞社にお願いがある。次の版の出版を、ぜひぜひ急いで欲しいのである。

私どもが『原色日本淡水魚類図鑑』の初版を出した1963年には、活字を一つ一つ拾って組版し、印刷するやりかただったから、1字1行を変更するということさえ、たいへんなことだった。「若干の補充と修正をこころみ」た第2版は2年後に出たが、第3版に当たる「全改訂新版」なるものを出したのは、その10年後である。しかしその後、写真植字が普及し、さらに、「パソコン」などを使って作ったデジタル組版資料から、直接に印刷物を作成することが、多くの出版物でも一般的になっていると聞く。この場合は、原稿の訂正や追加などは、以前に比べてたいへん楽になるし、さらには、そのまま「電子図書」などといった方法で、配布することも可能だ。このようなさまざまなやりかたを試みて、読者に新しい情報を与えることにも挑戦してみたい。

この本が、岐阜県の淡水魚の豊かさ・面白さ、さらには淡水魚を取り巻く自然の楽しさを知り、それを積極的に確かめ、さらには、どんな小さなことでも良いから、新しいことを自分で新しく見つけるための、導きの書になって欲しいのだ。

そして、例えば、河口堰の建設によって、長良川の淡水魚とこの川や周辺の環境が、どのように変化したかを、各自で考えて欲しいものだ。私自身の考えを言えば、せめてはあのゲートの開放を、そのきっかけは「試行」としてでも良いから、絶対に行なうべきだと、切に望んでいる。そもそも、河口堰建設以前の状況の調査がまさに「ずさんな」まま、あの建設はなされてしまったのだ。さらには、水門の閉鎖そのことも、まさに「試行」の名のもとに行なわれたものなのだ。従って、早急にそれ以前の状態に戻すことは、当然の理なのである。そしてこのような問題は、揖斐川をはじめ、岐阜県各地の至るところでも、日本列島の他の場所と同様に進行していること、残念ながら事実なのである。

その手引きの一端が、この書には充分にある。それを、大いに喜びたい。(2020年4月末日記)

(かわなべ ひろや)

京都大学名誉教授、滋賀県立琵琶湖博物館初代館長、元日本自然保護協会・河川問題調査特別委員会委員長

## サツキマス漁師・大橋修さんのお話を聞く

大橋修さん（1937年生まれ）は昨年亡くなられた2歳年上の亮一さん共に、物心がつく頃から祖父と父親の後を継ぎ、長良川で漁をしてこられました。今年2月に、事務局の3名（高木・武藤・成瀬）が長良川に近い羽島市小熊町のお宅でお話を伺いました。

当日の様子は市民学習会のHP(dousui.org)にあるYou Tubeでご覧いただけます。



－ お兄さんの亮一さんが亡くなられてもう一年、修さんはどうしておられるかなとみんな思っていました、お元気そうで安心しました。

修 ありがとうございます。私は長良川という川が親父（おやじ）や母親みたいに思っとるんで、ほんやもんで、ちょっと川に行かんと「おお何やとるんじゃ、早う出てこんか」と言われとる声が聞こえてくる気がして、川に行つて「やあすまん、もうちょっと時期が来るまで待ってとってくれよ」と一人喋りしとるんです。

サツキマス漁はご存知のように川掃除しないかんのです。昔は川掃除なんかやらんでもすぐ漁がやれたんです。今は川の状態が違ってまったので、絶対やらないかんのです。私一人だと一月はかかります。兄貴と二人だった頃は10日くらい。とてもやないが今は慌ててやれるような、もう若い衆とは違うもんで、2月1日からはじめて、天気の良い日、風のない日に出かけて行って、4月半ばぐらいまでには完成したいなあと思っとるんです。

－ サツキマスをアクア・トトに納められるのは難しいですね。

修 昔、ようけ捕れた頃は、水族館に行くやつを、100匹に1匹くらいの確率でも捕れたから、向こうが欲しいだけは納めれたんやけど、今は全然おらへんでね。傷がない、鱗がとれてないのはなかなか捕れへんです。数年前頃、とてもじゃないけど今までの網ではダメなので、「大きいやつは逃げるかもしれんけど、網目の大きい網を作り直そうか」と言うのと「そうやな、そうしてくれるか」と兄貴に言われて作り直したんです。網や道具は昔から、全部私がこさえてきました。そうしたら傷の少ない、ピカピカの綺麗な女の人みたいな（笑い）、子供さん達に見てもらえるくらいのやつを、なんとか納められるようになりました。

サツキマスは川一杯を上ってくるわけじゃなくて、川の中の半分のうちのまた半分くらいの、マスが上ってくるころにうまく網を入れることが大事やね。

\*世界淡水魚水族館 アクア・トトぎふ：岐阜県各務原市の木曾川のほとりにある淡水魚専門水族館。木曾三川の生き物のほか、世界各地の淡水魚を生息環境とともに紹介している。

－ お一人で漁はやりにくくないですか？

修 サツキマス漁に関してはめいめいでやったりしました。昔は昼は兄貴、私は夜で別々にやったりです。堰ができて2年目くらいからは、マスもおらへんし、流速がなくなって琵琶湖みたいになってまって、昼間は流しに行つても一匹も捕れへんようになって、二人一緒に夜だけ行くようになりました。今も、私は夜やったりします。

－ 最近のサツキマスはどれくらいでしたか。

修 昨年（2019年）は28匹やっただです。みんなから「どうだ」と言われるけれど「サツキマスなんて全くおらへんよ」と言ったりします。堰ができる前の一晩分が今の一月分やよ。去年もそうやっだし、兄貴がおった一昨年（おとし）もそうやっした。

\*漁は4月頃から6月頃まで。皐月の咲く頃。昔に比べて始まりが遅くなっている。毎日捕れた分がカレンダーに書き込んで記録してある。



－ 他の魚はどうですか。

修 モクズガニ漁が一番難しいんです。兄貴が川底を見て「ここはええところやな、あそこは20は入るぞ」と言うんで、私は「そうかな、あんまりええことないぞ」と言い合つて、カニ籠を入れるがね。翌日上げてみると5、6匹。「なんでやあね。おかしいな。俺をバカにしとるな」と兄貴。「よう見てみる。ここはあかんと思ったよ」と私。1メートルとは言わんけど2メートル離れると、こっちで30入つとつても、こちらは1匹か2匹。入るところとそうでないところがあるんです。それくらい難しいんです。

普通の魚は、今の若い子たちは魚離れでそう食わへんで、ドンドン低下しとるけど、モクズガニは今、中国

人が大勢岐阜県にもみえるためか欲しがられて、漁が年々増えてきてるね。

\*モクズガニの放流事業は昭和61年(1986年)から始まり、平成28年度(2016年)は218キロ放流。(岐阜県水産統計より)

川の様子はどうですか。

修 今、長良川は俺と一緒に、結構老衰したなあ、といつも思ったりします。前は、俺が若かった時分は、こんな川じゃなかった。川へ行けばせせらぎがあって、本当に綺麗な水がどうどうと流れ、舟に乗ってちょっと出かければ魚がいくらでも目について、あっちには大きなやつ、こっちには稚魚が一杯あって、漁師も捕まえきれんなあと思ったもんです。

今はどうやね、魚なんて本当に一匹もおらへんがね。オイカワ、シラハエなんかはせせらぎのさらさらした浅いところで産卵するんやけど、そんなところはあらへんがね。これじゃ小さい魚は産卵するところがなくなってまって、本当にかわいそうやなあといつも思ったりします。

私が言うに「漁師やから、生活がかかるとるから、そう言うのも当たり前やがね」と言う人もおるんやね。「たわけたこと言うな。漁師だからからとか、そんな小さな心でおったら本当に薄情な人間になるわ」と言ったりします。

今は、川へ行った時の気分が全然違います。昔の長良川と今の長良川の違い、一番見やすいのは河原やね。昔は河原には木一本、草一つ生えとりませんでした。今は柳が生えたりして陸(おか)の上とちっとも変わりやしません。裸足で歩いてさらさらやったんです。今は裸足で歩いたらベタベタになって、ドロとかいうかヘドロがへばりついて落ちいへんです。いかに川が死んだか一目瞭然やね。

兄貴はね、「俺の生きとるうちに、元の長良川になれとは言わんけど、元の長良川に近づいてくれたら俺もほんとに嬉しいけどなあ」とよく言ったりしました。「全くやなあ、夢みたいな話やなあ、生きとるうちには昔の長良川は見れんぞ、仮に今、堰が開いたとしても、元になるには2年や3年では戻らへんぞ、でも開けば全然違うぞ」「そらあ、そうやなあ」と二人で話したりしました。



\*大橋さんの関連記事は、HP(dousui.org)のニュースのバックナンバーでお読みいただけます。

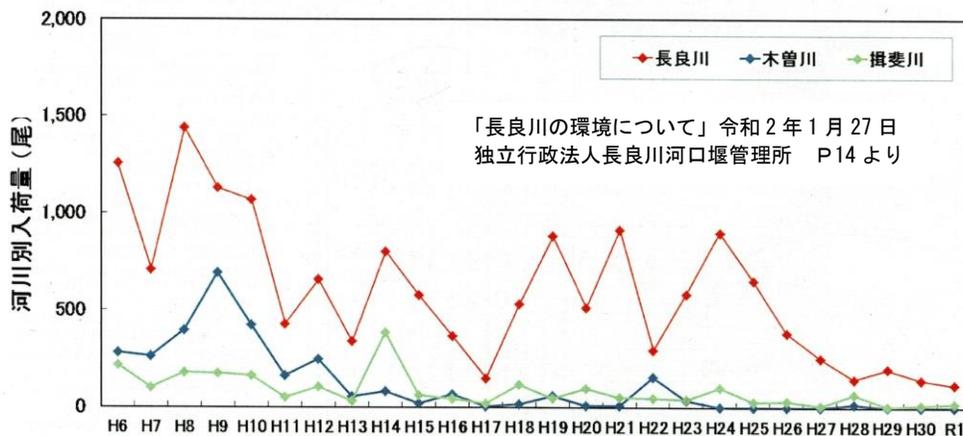
No. 16(2013) 「長良川のアユ、いま・むかし」を語る(2)

No. 21(2015) 次世代につなぐトーク「長良川に生きる」

No. 24(2017) 『長良川漁師口伝』 あたりまえだった風景があこがれの風景に変わる一瞬

\*「長良川漁師口伝」人間社(2010年6月10日発行)は、今Amazonで8000円を超えるほど貴重な本となっています。現在、当会には作者の磯貝さんからご寄贈いただいたうち3部在庫があります。送料込みで3000円でお届けします。希望される方は事務局(mutohitoshi@yahoo.co.jp)までご連絡ください。

サツキマス 岐阜市場入荷尾数の経年変化



\*左と下のサツキマスに関する図表は、「令和元年度岐阜県長良川河口堰調査検討委員会」に提出された資料です。  
放流尾数と入荷尾数の乖離に、毎年委員からは「何故だろう」の意見が出されている。  
この委員会では「河口堰開門」は禁句となっているのか、議論は堂々巡りを繰り返している。

長良川漁協は2005年から毎年、河口の人工河川・せせらぎ魚道を利用して、銀毛アマゴ(サツキマス)の稚魚を放流している。2019年(令和元年度)は約1,210キロ(13,800尾相当)放流した。「長良川環境について」P32より

過去の実績	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
	約14,500尾	約15,000尾	約15,000尾	約15,000尾	約15,000尾	約12,000尾	約12,000尾	約12,300尾	約12,300尾	約12,100尾	約12,000尾	約12,100尾	約12,100尾	約13,600尾

## 「河口堰運用 25 年に思う」

名古屋市 亀井浩次

私が長良川の現場での行動に参加したのは 1992 年 10 月 4 日の「長良川 DAY」が最初だったと思う。自然保護に関心をもちはじめたのは 1980 年代半ばごろ、全国的に自然と開発をめぐる問題が頻発しており、九州の諫早湾干拓や川辺川ダム、四国の吉野川可動堰、瀬戸内の豊島産廃、山陰の中海宍道湖淡水化、関東の八ッ場ダム、相模大堰、三番瀬埋立、東北の春秋林道、北海道の千歳川放水路など大規模事業が目白押し、当地域でも私の現在の主要フィールドである藤前干潟の埋立問題や、海上の森の万博会場問題、芦浜原発、御高産廃、徳山ダムなどが話題になっていた。長良川河口堰はその中でも代表的な事案として社会的な関心を集め、全国から注目される問題となっていた。

ローカルレベルでは収束したかにみえた河口堰の反対運動が全国レベルで再燃したのが 1988 年、河口堰現地での大規模行動「長良川 DAY」の初回が 1991 年でこのときは所用で参加できず、「世界行動 DAY」と銘打った翌 92 年にキャンプ道具・カヌー持参で初参加となった。参加者 12000 人、河川敷の大テント村、水面を埋めるカヌーデモ、と運動の勢いを実感する大イベントで、さらに翌 93 年の自民党が初めて下野した政権交代によって河口堰事業の中止は確定したとだれもが思い、私もそう確信した。



「長良川 day95」にて

しかしなぜか事業は止まらず、95 年、ゲートが下ろされ、長良川は「流れない川」になった。

この 25 年を振り返ると、その間に当時の多くの事業は中止されたり代替措置が講じられたりして解決をみた。藤前干潟は、99 年に埋立計画が撤回され、2002 年にはラムサール条約に登録されて保全が確定している。春秋林道が途中で止まった白神山地は世界遺産となり、また吉野川（住民投票）や芦浜原発（白紙撤回）が今年節目となる 20 周年を迎えたことは報道に新しい。その一方、諫早湾や徳山ダム、八ッ場ダムなど完成してしまった事業もあり、運用後の問題点も指摘されたりしているが、なかなか抜本的な見直しは進まない。

「長良川 DAY」参加当時私は 32 歳。当時活動を牽引していた人たちも、他界したり高齢化したりして次世代への継承も課題になっているが、最優先すべきは継承する前に解決すること。5 年前の集会挨拶で「30 周年はやりたくない」と発言したことを覚えておられる方もいると思うがすでに折り返し点まで来てしまった。改めて具体的な解決法を考えてみたいが…やはり政治を動かすしかないか？韓国も文在寅政権になって「四大河川事業」の見直しが実現したのは周知の通り。25 年前、社会党建設大臣（当時）でも止められなかった河口堰事業を変えられるのか？とも思うが、運用後の悪影響や水需要の減少、防災意識や社会構造の変化などを考慮すれば決して無理ではない。愛知県が積み上げている「試験開門」に向けての議論も重要な材料である。とりあえずは環境保全より経済優先が顕著な（しかし経済もうまくいっていない）現政権を変えることが必要だろう。がんばりましょう。

追記：最近は何回か沖縄に行き、辺野古でカヌーに乗っている。新基地建設工事に対する抗議（妨害）行動。これもやはり止めなければならない事業だが、河口堰同様、政権交代によって実現するしかないだろうと思う。設楽ダム・石木ダム・上関原発など、各地で開発事業と闘っている皆さんとも連帯していきたい。

（NPO 法人藤前干潟を守る会・理事長）



沖縄・辺野古での抗議行動

# 私の青春と河口堰閉鎖 25 年

名古屋市北区 渡辺 泰

1986年に名古屋市水道局に入庁し、市民と自治体労働者の共同の運動に駆け上がっていた頃。活動家としての私の最大のエポックが、長良川河口堰閉鎖（1995年7月6日）です。チェルノブイリ原発事故、ベルリンの壁崩壊、湾岸戦争、天安門事件、全労連・連合の結成、消費税導入、非自民細川・村山内閣など、戦後の枠組みが怒涛のごとく変わっていく時代でした。河口堰建設が始まった長島町で開催された集会とデモ行進に、当時交際していた恋人と参加したことが、今でも鮮明に思い出されます。

名水労は当初、「長良川河口堰反対」の方針を確立しておらず、曖昧な態度でした。「環境派」の先輩活動家（武藤 仁、加藤 伸久の両氏ほか）とともに運動し、1993年の「長良川デー」から組織として正式に運動に参加したと記憶しています。自治体労働運動の分裂が大都市中心に進んでいた中で、「長良川河口堰反対」の方針を組合分裂せず確立できたのは、先輩たちの先進性の表れだと思っています。木曾川大渇水（1994年）、阪神淡路大震災（1995年）、名古屋市水道料金値上げ（1996年）と、名古屋市水道事業が激動する中、企業主義に陥らず名水労が「市民の水を守る運動」を展開できたのは名水労運動の貴重な財産です。

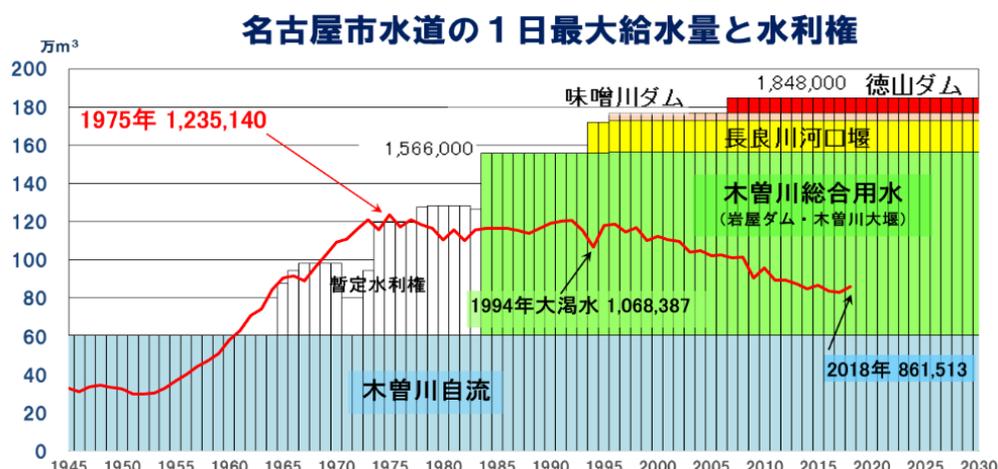
名古屋市が最大給水量（124 万 $m^3$ /日）を記録したのは、今から45年前の1975年7月。約半世紀、給水量が減少している名古屋市は、河口堰で開発された水を25年間一度も利用していません。終わらない市民運動と名古屋市当局の賢明な判断（?）、あつての賜物と思います。長良川河口堰が不良資産として更新時期を迎え撤去されるまで、果てしなく運動しましょう。

私の青春は、「河口堰反対」ある限り続きます。

（名古屋水道労働組合・前中央執行委員長）



上：長良川デーに参加する名水労。デモ隊に登場する名水労宣伝カーのTVニュース映像に、当局幹部はいつも冷や冷やしていた。  
左：1994/12/18「検証：94 木曾川渇水」名水労本庁・千種・中・熱田中川・昭瑞支部主催。講師の富樫・伊藤先生の姿が若々しい！





## 長良川河口堰建設反対運動で出会ったもの

岐阜市 堀 敏弘

長良川河口堰建設反対運動に関わるようになって30年ほど経つが、河口堰は1995年に運用され始めてしまって25年が過ぎた。結果だけを見れば国に負けたということになるのであろう。しかし私にとってこの運動に関わったことが私の社会の見方について大きな影響を与える事になりそれは現在までつながっている。

その一つがだまされるということについてである。河口堰は多くの嘘が重ねられ建設された。

「河口堰は水害に役に立つ」、「水は必要」、「環境悪化は起きない」など単純なものだけでもきりが無い。しかし、結果的に住民は建設を容認してしまった。なぜなのかと運用され始めてからもずっと考えている。後付けの建設目的とはいえ、水害防止で水を流すために河口にダムを造るというあまりにもおかしな嘘になぜ多くの人は平気で慣らされてしまったのか。金の問題や政治的な力が原因にあるだろう事は想像できる。しかし私にはそれだけかという疑問が残る。

そんな事を考えているときに出会ったのが以前事務局便りで書いた「だまされること責任」という本だった。私にとってこの本は河口堰問題に関わらなかつたら興味を持つこともなく出会うことはなかつただろう。

特にその中で紹介されていた伊丹万作の「戦争責任の問題」という一文は自分の中にずっと残っている。そして「国民同士が相互にだまし合わなければ生きていけなかった事実」という言葉を見つけて河口堰建設でだまされた訳についても少しだけ納得もできた。この文は「かつての戦争の責任をだまされたと言って軍や警察や官僚にのみ負担させて、彼らの跳梁を許した自分たち国民には責任はなかつたのか」と問うているものである。つまりだまされることにも罪があるのではないかと問うている。

彼が言う『だまされていた』という一語の持つ便利な効果におぼれて、一切の責任から解放された気である多くの人々の安易きわまる態度を見ると、私は日本国民の将来に対して暗澹たる不安を感じざるをえない。

『だまされていた』と言って平気でいられる国民なら、おそらく今後も何度でもだまされるだろう。いや、現在でもすでに別のうそによってだまされ始めているにちがいないのである」という言葉はそのまま今に通用する。

河口堰ができた後に生れた『コンクリートから人へ』の民主党政権。結局何もできずにスローガンそのものが嘘になってしまい崩壊した。しかしその後生れた安倍政権はどうだ。

森友・加計、桜を見る会と嘘に嘘を重ねだまし続けている政権を国民は8年近くも続かせている。多くの人は嘘だと気づいているのにあまりにも多くの嘘が続くので慣れてしまったのか、その嘘について無頓着な状態が続いている。安倍政権はよく「悪夢のような民主党政権時代」というキャンペーンを張るが、批判されなければいけない民主党政権時代ではあっても、その事が嘘をついてのうのうとしている政権が許されることにはならない。もし「悪夢のような民主党政権時代」という言葉に効果があるとしたら、あの「コンクリートから人へ」を支持した多くの人の意思も嘘だったので、国民の側に少し後ろめたい気持ちもあり今の政権の嘘に甘くなるのかとも伊丹万作の一文を読んで考えた。

今の状況を伊丹万作氏が見たらどのように言うのか聞いてみたいところである。

苦笑いしながら「また同じことを繰り返していますね」というかな？それとも「やっぱり私の思っていた通りだったね」と言うだろうか？

ただ、私自身は河口堰問題に関わってしまった腐れ縁みたいなものから、今後何が起きるにしても「だまされるということ自体が一つの悪である」という伊丹氏の言葉の元で、河口堰の問題点をこれからも問い続けると共に、権力の嘘を問いつめ続けていくことになると思っている。なぜなら導水路計画などの公共事業から憲法改正まで権力を持つ側がやりたいことは山ほどあるようであるから。

(長良川河口堰に反対する会・岐阜)

# 河口堰開門に向けて — 開門しても農業塩害は生じない —

名古屋市 在間正史

筆者は、1976年に弁護士となり、当初は「長良川河口堰に反対する市民の会」に参加し、1978年からは、故村瀬惣一さんとともに、知事の河口堰本体着工同意に対する抗告訴訟に始まって、1982年の河口堰建設差止訴訟、1998年の河口堰公金支出差止住民訴訟を一人弁護団として担ってきました。

上記訴訟では、①河口堰は川と海との間の自然の循環を遮断し、環境を悪化させ、②開発する水は需要がなく、③砂利採取と地盤沈下による河床低下によって、大規模な浚渫をしなくても計画高水流量の洪水を流せる河道となっていて、この浚渫は必要がなく、④農業塩害を起こすような塩水の遡上は生じないので、河口堰は有害で必要性もないことを明らかにしました。①～③は1995年の堰閉鎖後、事実によって明白になりましたが、④の問題は、堰が閉じられたままのため、事実が明らかにされていません（塩水遡上実態の事実調査が開門調査です）。訴訟で判ったことに基づき、新たに判明した事実も加え、堰を開門しても農業塩害は生じず、開門（調査）が可能なことを報告します。

大規模浚渫をすると、塩水が約30km地点まで遡上するため、長良川用水の25.1km地点の新大江取水口と29.5km地点の勝賀取水口に塩水が達することになり、農業塩害が生じるというのが河口堰建設（開門反対）の理由です。

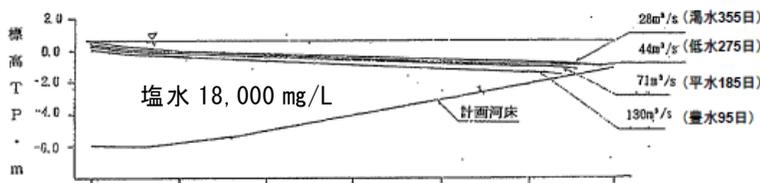


図1 浚渫後の弱混合時の塩水遡上距離の計算予測

建設省河川局ら『長良川河口堰に関する技術報告』の図1です。

塩水遡上は、月齢（干満潮差）と河川流量により、概念的には、塩淡水の混合がなく上層淡水・下層塩水（塩水くさび）の弱混合（平水流量程度以下で発生）、塩淡水が上下一様に混合する強混合、その中間形態があるとされています。図1は塩水が最も遡上する弱混合時の計算予測です。強混合時の予測は、塩水は、最大15km地点付近までしか遡上せず、上記取水地点には達しません。

実際には、弱混合時でも、図2（建設省中部地方建設局ら『長良川河口堰調査報告書 平成7年7月』）のように、下層塩水（塩化物イオン濃度 18,000mg/L）と上層淡水に二層化していません。塩分濃度は、下流から上流へ10,000mg/Lから200mg/Lに小さくなり、水深・縦断方向で低減しています。そして、塩水は15～17km地点の河床盛り上がり部（マウンド）を越え、等濃度線がマウンドを越えると勾配が急激に縦断方向になって鉛直化し（強混合）、塩分濃度が急激に低下して、マウンドから1～2km上流の18～19km地点で遡上が止まっています。

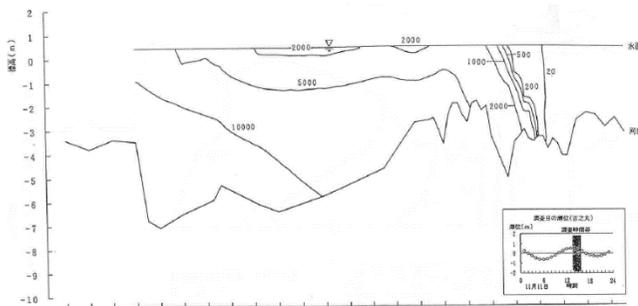


図2 実際の弱混合時の塩水遡上状態

これは、塩水はマウンドを越えるが、そこで河床が高くなっていることによって、上流から流れてくる淡水流との乱れが大きくなって強混合となり、塩分濃度が急激に低下して、塩水遡上が止まるということです。

長良川は、図1の計画河床に浚渫されましたが、その後、15～16km地点で再びマウンドができています。建設省の調査結果に基づくと、河口堰が開門されても、塩水の遡上は、強混合時はもちろん、弱混合時でも、25.1km地点の新大江取水口に達する前に止まるのです。

以上より、河口堰を開門しても、農業塩害は生じず、開門（調査）は可能なのです。

（元長良川河口堰建設差止請求訴訟弁護団）

（元長良川河口堰建設差止請求訴訟弁護団）

# 建造の堰、改めてご覧あれ

岐阜県笠松町 高橋恒美

過去の記録をめぐっていたら、建造時の様子を伝える「通信」をみつけた。

「川石一つさえ採っても怒る建設省が、河の首を絞めるこんな障害物をよくつくるよ」と痛感したのを覚えていた。通信は私が編集していた。  
(旧「市民の会」)



「河口せきに反対する市民の会」発行 1993. 3. 31  
連絡先は：岐阜県羽島郡笠松町東陽町36-4 高橋恒美  
\* \* \* Tel. 05838-7-4661  
10年以上にわたる裁判を頑張っている原告団と弁護士を財政的に支える「長良川訴訟サポートネットワーク」には是非ご参加ください。<一か月会費> 一口 500円 (一応の目安です)  
<送り先> 郵便振替番号 名古屋1-18402 「長良川河口せきに反対する市民の会」 事務局は：名古屋市瑞穂区南山町17-2 田中万寿 Tel.052-834-9246

## 12.9現場検証

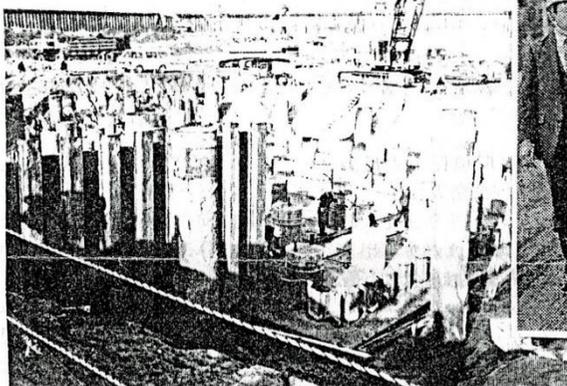
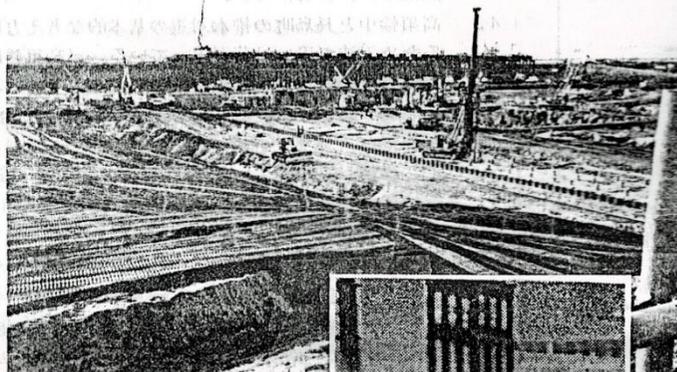
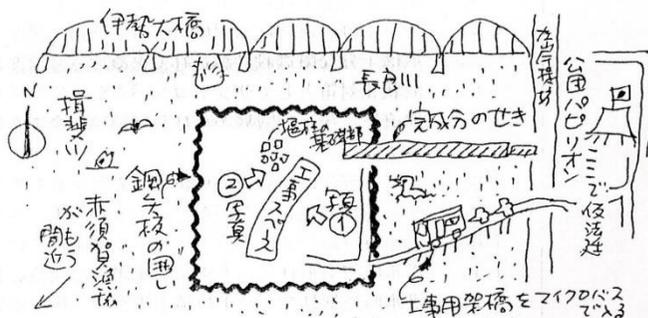
十月九日、十日両日の河口せき裁判は、ホームグラウンドの岐阜地裁を離れて桑名簡易裁判所で行われた。九日は建設現場に向いての「現場検証」。現場検証を中心に九日の報告をする(翌十日の報告は裏面)。  
まず桑名簡裁で水資源公団河口せき建設所長の中村稔氏の尋問。中村氏は「せき建設現場に直径九センチの『砂の杭(くい)』を一万本打ち込む『サンド・コンパクション』

パイル工法』を実施した」と得意気に証言したのが印象的だった。しかし、これは地元市民グループらに指摘されている地震時の「液化化現象」の危険を意識してのこと。裏返しを言えば、液化化の危険が大いにあり得ることを吐露したに等しかった。  
午後にはいよいよ現場へ。河の中央で行われている工事現場に入れたのは裁判長、原告被告ら裁判関係者らとマスコミ関係者だけ。一行はマイ

クロバス二台に乗って工専用架橋を渡っていった。(以下の報告は同行マスコミ関係者の感想。写真も)。  
この日の長良川は増水して、鋼矢板に囲まれた工事現場は水底に沈んだよう。鋼矢板が壊れたら、どっと水が押し寄せてきそう、それを思うとゾッ。河口せきの橋脚は全部で十三基だが、現場は八基目の橋脚づくりが進められていた。ブルドーザーがうなり、大勢の作業員が広いス

ペースを嫌(あり)のように忙しそうに動き回る。橋脚基礎部分には深さ五十センチのパイルが六十二本打ち込むとのこと。河底をこんなに削ってキズつけて、河の悲鳴が聞こえてきそう。あらためてジャンボな工事を実感。これでは長良川が大ダメージを受けるわけだ。  
長良川の裁判長は、この河口せきに、どんな感情を抱いて帰ったのだろうか。

# 川を鳴動怒りの河



写真② 人とパイルの大きさに注意

↑写真① 長良川河口せき裁判長(中央)が行く=読者新報から

## 河口堰閉鎖 25 年に思う

岐阜市 千藤 克彦

私が岐阜市に住み始めたのは、1979 年の春だった。それまでは、恵那市の田園地帯に住んでいた。

初めて見る長良川は大きな川だった。長良橋の下流の川原で水辺に近づいた時、岸边近くにいた体長 15 cm くらいの黒い魚が、数尾急に泳ぎだして深いところにある石の陰にかくれた。それまで家の近くの本曾川の支流で魚とりをして遊んでいたが、こんな魚は見たことがなかった。調べてみるとヌマチチブのようだった。ダムで分断された本曾川中流域の支流にはいない魚である。「さすが長良川！海とつながっていると面白い魚がいるんだな」と思ったことを憶えている。

1982 年、大学で故 和田吉弘先生の研究室に入った。和田研究室はアユを中心に水生生物の研究をしていた。河口堰建設推進派として知られた先生だが、学生時代から卒業後まで、「ダムができる川はだめになる」という話はよく聞いたが、「河口堰ができて川は生物は大丈夫」というような話は聞いたことがなかった。

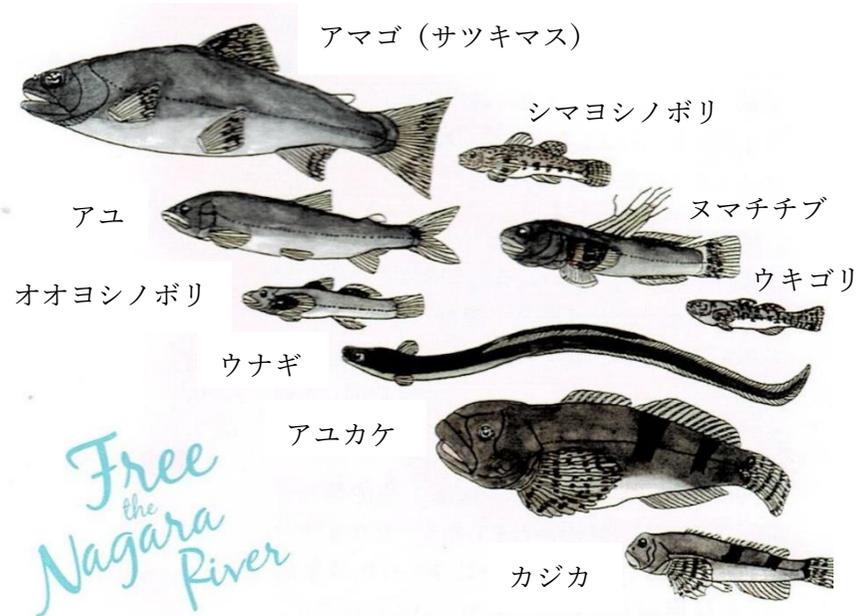
長良川の魚について和田先生にいろいろ教えていただいた。美濃市あたりの長良川に調査に

行った春の日に、橋の上から川を覗くと、体長 50 cm くらいの大きな黒い魚の影が上流に向かうのが見えた。「黒い影はウグイだ。海から産卵に遡ってきたやつだろう。サツキマスは影が白く見える」と教えてもらった。海から美濃市まで魚が遡ってくるというのは当時の私には衝撃的だった。

同じ春のある日、金華山の下で長良川では、カモメが数羽水面上を舞っていた。「あれは、遡上してきた稚アユを追って海から上って来た。以前は見なかったが、最近(当時)見かけるようになった」「年によって遡上が早い時や遅いときがあるけど、岐阜市から見て、冬の間真っ白だった伊吹山が、雪が解けて縦に黒い筋ができるころ、稚アユは岐阜市まで遡ってきている。これは毎年一致している」。

大学を卒業してからも、郡上八幡の長良川の支流亀尾島川の百間淵でサツキマスウォッチングをしたこと、岐阜市古津で、潜って海と川を行き来している小卵型カジカを捕まえたことなどを思い出す。河口堰ができる前の長良川は、魚をはじめとする水生生物の豊かさが感じられる川だった。

カヌーイストの野田知佑氏が、今まで下った川で特に印象に残っている川として長良川を挙げている。「地元にあれだけ川漁師を生業にする人がいて、全国から釣り好きの人たちがくるのに、川にはびっしり魚がいて、驚くべき現象だったね」そして現在の長良川について、「何年か前に、長良川の支流の板取川に潜ったんだよ。水は本流より澄んでいるんだけど、魚影が全くなかった。ぞっとしたね。昔は本流でも支流でも、岸の上から見れば真っ黒な魚の群れが分かったし、潜れば視界いっぱい魚がいたんだけど。川が死ぬってのはああいうことだね。本当に残念なことだ」(OUTWARD SUMMER 2020 No. 87)



生物画：後藤宮子 デザイン：高橋由実

野田氏は「長良川は死んだ」と言ったが、アユもサツキマスも小卵型カジカもまだ長良川から絶滅はしていない。河口堰の門を開け放せば海と川を行き来する魚たちは劇的に回復するだろう。長良川下流域から絶滅したイトメやベンケイガニ、クロベンケイガニ、水辺の植物たちは、両側にある揖斐川、木曾川から侵入してきて復活は早いだろう。今からでも遅くはない。河口堰の門を開けて長良川を復活させるべきである。

河口堰閉鎖から 25 年。河口堰ができてよかったという話は、今までほとんど聞いたことはない。時代も令和という新しい時代に入った。今こそ昭和の古い論理、価値観から脱却して、新しい価値観で長良川を復活させるべきである。開門した長良川が見られる日が来ることを、私は信じている。

(元長良川下流域生物相調査団)



長良川下流域環境観察会で、ベンケイガニの説明をする千藤先生。

## あれから 25 年

羽島市 中川 敦詞

長良川河口堰が出来て 25 年。もうかなりの年月が過ぎている。

私が長良川河口堰について知ったのはまだ未成年のころ TV で反対運動を見ていたからだ。子供ながらに「川をせき止めるなんて」と大きなことだと思っていた。

社会人になり、市民活動をしていて長良川市民学習会と出会った。そこではこの長良川河口堰の反対運動が続いていて「とても長い戦いだ」と感じた。イベント出展、シンポジウム、クイズ、スタディツアーのスタッフとして楽しみながら関わってきた。

この長良川市民学習会は国内のみならず、オランダや韓国との連携もあった。

韓国の方から「韓国が日本に学ぶことは日本が科学的データを大切にしていること」「日本が韓国から学ぶことは市民が社会を変えることができるということ」この言葉は衝撃的だった。とても意義深いものがある。



2010年生物多様性 COP10 イベントで行った「長良川河口堰のヘドロ観察会」で記録写真を撮る中川君。

韓国の方は長良川を見て本当に喜ばれていた。「水や川は流れてこそその清さを保つ」と私は思っている。

今でも長良川河口堰は無くしたい。いや、なくても十分生活できた。それでこそ自然だと思う。

(長良川市民学習会)

## 河口堰閉鎖 25 年に思う

大垣市 近藤 ゆり子



私は、1977 年に大垣に移り住んだ。岐阜県民の半分以上が長良川流域に暮らしているそうだが、大垣では「長良川」はよその地域の川であって身近ではない。それでも 1980 年代後半になってからの長良川河口堰建設反対運動は、全国紙でも頻繁に取り上げられて、

比較的よく知ることになった。梶原知事の強引なやり方への反感も強まった。しかしまだ、どこか他人事であり、機会があれば署名する、カンパする、という程度であった。1995 年 7 月に長良川河口堰が「本格運用」に入った直後、「建設省が『中止も含めた見直し』として全国 11ヶ所（後に 13ヶ所）に『事業審議委員会』を設置する、対象として徳山ダムが入る」という情報を、日本野鳥の会岐阜県支部西濃ブロックの集まりで知った。行政主導での「中止も含めた見直し」が、真っ当になされるとは思えなかったが、それでも「問題・課題」として取り上げることは半歩でも前進には違いない。「反対運動」が存在しない徳山ダムが対象となったのは、長良川河口堰の身代わりとして一同木曾川水系水資源開発基本計画に位置付けられる水資源開発公団の事業一なのであろう。長良川河口堰では、まともに運動はやらなかったからこそ、揖斐川流域の中心的都市・大垣の住民として声を上げねばならない、と思った。

長良川河口堰のときは「反対」の意思を明確にしていた野鳥の会岐阜県支部だったが、役員の世界交代の所為か、徳山ダムについては「（反対の声を上げるのは）待て」と抑えるばかりで前に進まない。12月20日には「徳山ダム建設事業審議委員会」の初会合が開かれてしまった。「もう待てない」と、12月25日に、野鳥の会の古会員である上田武夫さん、西濃ブロックで積極的に活動していたTさん、そして亡夫・正尚と私の4名で「徳山ダム建設中止を求める会」を立ち上げた。

1年2ヶ月後、「徳山ダム建設事業審議委員会」は予定通り“に建設推進の答申を出した。とはいえ、情報公開制度もない中、建設省のさまざまな資料がオープンになったのは収穫だった。私のような「河川問題ド素人」でも、結構河川官僚と渡り合える知識を身に着けることができた。他の場所（吉野川可動堰、苫田ダム等）の「事業審議委員会」が、数回の密室審議でさっさと建設推進答申を出したのに比べれば、ほぼ全面公開でフルメニューをこなした「徳山ダム建設事業審議委員会」は「模範的」であったといえる。それは長良川河口堰反対運動が、建設省に与えたインパクトの大きさ—河川法改正をもたらした—故であったと思う。

とはいえ、私の中では「長良川河口堰＝過去のこと」だったのが、自らが直面する問題となったのは 2007 年に「徳山ダム導水路上流分割案」が表に出てからである。徳山ダムの水の使い道はない、長良川河口堰の水もロクに役立っていない。その現状を一気に「解決」しようという土木屋ならではの発想である。「巨大構造物の建設は正義である⇒建設したからには有効に活用しなければならぬ⇒そのためにさ



らに土木構造物を建設する」。原資が税金（及び公共料金）だからこそ20世紀の遺物でしかなく、現在となっては経済合理性の欠片すらもないこの発想が生き続けるのだろう。「原資が税金」であることの巨大な負のツケで、岐阜県民は苦い目に遭っている。

九州長崎では、現に13世帯50余名の人々が豊かに暮らし続けている場所を強制収用してまで石木ダムを造る、と長崎県は突っ張っている。

人の営みを壊し、生態系を壊し、未来にわたって自然環境を破壊し続ける。「こんなことはもうやめよう！」と声を大にして言いたい。

(徳山ダム建設中止を求める会・事務局長)

## 国会請願行動・30年—毎回上京提出に参加して

岐阜市 加藤 守

河口堰に反対し、長良川を守る岐阜県民の会（長良川県民の会）は、1989年12月に結成し、翌90年10月に「河口堰建設反対」の国会請願署名の第1回分として約1万5千名分を提出。それを皮切りに一昨年までに10回提出（合計約5万人余）し、現在11回目の署名運動に取り組んでいます。私はこの上京しての国会提出に毎回参加してきました。

河口堰反対の活動には、集会・講演会・学習会・川の現地調査・県など自治体との交渉（要請）・街頭宣伝・宣伝物の発行（配布）等々様々な活動があり、それぞれ非常に大切で大事な仕事です。

その中でも署名運動は「いつでも」「どこでも」「誰でも」参加できる活動として重視してきました。

国会提出のはじめの約10年間は「長良川県民の会」の代表であった山本堯先生（岐阜大学教授）を先頭に、自民党の環境庁庁官（現在は大臣）経験者など環境問題に関心をもっている議員とも幅広くあたり話し合ってきました。その後の10数年は現在の政党状況からいえば、立憲民主党、国民民主党、日本共産党、社会民主党の各国会議員が中心になっています。

署名運動を進めるには、活動に参加しておられる方々や各種団体への協力お願い、同時に「長良川県民の会」としての独自の街頭署名を重視してきました。この30年間、毎月1回（最初の数年は複数回）岐阜市内でおこなってきました（台風とき、最近ではコロナ禍で中止したこともあります）。

河口堰の開門に向けて今後とも各団体と協力しあいながら活動をつづけていきたいと決意を新たにしています。



岐阜市柳ヶ瀬商店街での街頭署名行動

(河口堰に反対し、長良川を守る県民の会)

# 愛知県の河口堰最適運用検討委員会

岐阜市 富樫 幸一

2011年の大村愛知県知事の登場を受けて、長良川河口堰検証プロジェクトチームの報告書が2012年1月に出され、さらに同年6月からは愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会として現在まで8年間、取り組みを続けてきた。並行して県庁の庁内検討チームの報告書も毎年、出されている。小島敏郎座長が引き続いて担当されているが、国土交通省・中部地方整備局とのやり取りはあったものの、その後は「クリンチ状態」になってるといっている。

委員会の開催やチームでの打合せの他、県民に広く伝えるための「清流長良川流域の生き物・生活・産業」連続講座を5回、2019年11月には県民講座「河口堰開門の世界の先進事例を学ぶ」、さらに長良川環境・利水施設見学会（2018年11月）と続けている。残念ながら一般の人やメディアの出席者も次第に減少気味だが、学生の参加など、新しい視点を取り入れる工夫も行われている。

委員会での検討や連続講座などまとめた報告書として「166キロの清流をとり戻すために：まず長良川河口堰の「プチ開門」を実現しましょう」（2016年8月）に続いて、この2020年3月に「新しいフルプランの提言：水は賢く使う時代がきた！」を出した。いずれも印刷物の他（愛知県庁に問い合わせで入手可）、ウェブサイトからも閲覧できる

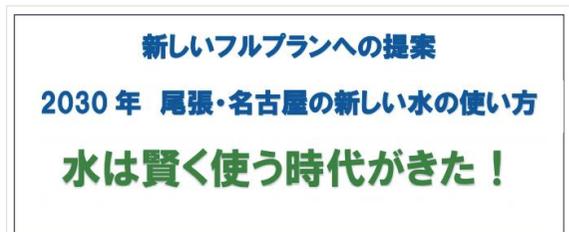
<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/mizushigen/mizuhakasikoku.html>

木曾川水系だけでなく、全国の水資源開発促進法の指定水系で、最近の目標年だったはずの2015年を過ぎても、新しい需要予測が作成されないという事態がまたもや続いてきた。水需要が減少する中で、これまでの右肩上がりの予測の誤りがもはや明らかになり、人口減少や節水の進展の中で抜本的な見直しが必要とされている。愛知県としても新たな需給想定調査は国から求められていない中なので、検討委員会としての独自に2030年まで、現在のトレンドの延長と、より節水を強化した場合の2案の需要推計を行なった。県の企業庁の中期経営計画（2025年まで）も前者のものに近づいている。

しばしばメディアで誤ったイメージ操作をしている「渴水」と、実際には影響しないように運用されている取水や給水の制限の運用との違いの説明や、家庭でのトイレや洗濯機などでメーカーの技術で節水化が進められている現状、さらに、国交省がリスク管理を過大視してフルプランを見直そうとしていることなども、この新しいパンフから学べるだろう。

韓国のナクトンガン河口堰やオランダのハーリングフリート堰での開門に向けた動きや、上流の塩分濃度をコントロールすることで半分、開けた運用をしている利根川河口堰のケースなど、長良川でもどのようにすれば開門調査ができるのか議論している。下流部の河床の堆積状況や、昨年の台風の高潮で海水が遡上した問題なども、新村安男・新委員を中心として議論している。「クリンチ」を解いて、再戦を始めるための準備が進んでいる。

（岐阜大学地域科学部教授）





## 「河口堰」反対運動と「導水路」中止裁判

導水路はいらない！愛知の会・共同代表 加藤 伸久

### 1. 「導水路」裁判の原点は「河口堰」&「徳山ダム」のたたかい

川の自然を守る観点から、木曾川水系の水需給関係に関心を持つ人々や流域住民にとって、1980年代以降、巨額の公費を投入して建設した長良川河口堰の水も徳山ダムの水も、“使うあてのない水”でしか有り得ないことは常識で、河川ムラ関係者にとっては「不都合な真実」である。

2002年「河口堰」中止裁判では、住民側が将来とも工業用水需要は見込まれないとの主張に対し、名古屋高裁は被告・愛知県資料に依拠して“断ずることもできない”と住民敗訴としたが、あろうことか県は判決を手に入れるや、2年後の2004年水需給想定調査では、取水計画を消し去る「禁じ手」を使い、これまで愛知用水を水源とする知多半島の水道用水に転用した。

水資源開発の後発、徳山ダムの水が使うあてが無いのは“火を見るより明らか”だ。にも関わらず、二つの訴訟（① 国交大臣が被告の事業認可取り消し、② 岐阜県知事が被告の公金支出差し止め訴訟）は2007年、いずれも住民敗訴で終結し、徳山ダムは2008年に完成となった。

使うあてのない水の辻褃合わせと「河口堰」の有効活用（？）のため、いわゆる「3県1市」（愛知・岐阜・三重・名古屋）と国交省が謀議密談。水資源機構が2009年度着手、2015年度完成予定で事業化したのが、建設費890億円と見込まれる「木曾川水系連絡（徳山ダム）導水路事業」であった。

### 2. 「導水路はいらない！愛知の会」かくたたかえり「導水路」中止裁判

まったく使うあてのない水のために、治水&利水費用を共に負担の愛知県が約318億円もの巨額の県税の投入は堪らない。間違っって建設された「徳山ダム」問題を露わにし、水資源開発行政を根本的に転換させる思いで2009年、県民有志が「導水路はいらない！愛知の会」を結成した。

同年5月、導水路事業への公金支出が違法であるとの県監査委員への「監査」請求は案の定、却下されたがその2日後、中日新聞の朝刊は1面トップで“名古屋市が「導水路」撤退”と報じた。撤退が現実になれば、“判決を待たずに中止”とばかり、われわれは大きく期待を膨らませた。

しかし、当時の県知事を筆頭とする推進派の凄まじい攻撃に、さしもの河村市長も反撃しきれず（・・今に至っている）。そのため、県民有志92名は6月、撤退表明を嫌悪・反発の頑迷な県知事らを被告に「導水路」事業への公金支出差し止めを求める住民訴訟を名古屋地裁へ提訴した。

足かけ8年の闘いは2016年、最高裁上告「棄却」決定で住民側の敗訴が確定・終了した。本件裁判もこれまでの行政裁判をなぞるが如く、名古屋高裁の判断は控訴人（私たち）が明らかにした主張に対して判断を記載せずダンマリを決め込み、判決に理由を付さない違法（理由不備）だらけの「孔あき」判決であった。憲法の番人・最高裁が“裁判所の判断はこの程度でよい”とは日本の司法制度はどうしようもない。

### 3. 不要不急の「導水路」事業の中止を決めるのは私たち市民

現在、当初の完成予定から5年経過したが、導水路は1mmも工事がされていない。2010年民主党政権下で始まった「ダム検証」は2019年現在、対象となった国直轄ダム及び水資源機構ダム31事業のほとんどが「推進」となったが、唯一残っているのが本「導水路」事業のみである。

多くの市民は、ムダな公共事業を望んではいない。凍結・検証中でも現地事務所は存続し調査業務などの名目で、毎年2億円を超える血税が投入されている。ダムが河川の生態系を破壊することも知っている。アベノミクスもトランプ保護貿易も“今だけ、金だけ、自分だけ”政策だ。

「コロナ禍」で多くの市民が苦しんでいる。“財政が苦しい”を枕詞の言訳に、福祉・医療・介護・教育の施策に大鉈が振るわれる一方で、大企業・ゼネコンが喜ぶ大型公共事業に湯水のごとく公金を投入の自治体行政を正さなければ、孫・子に申し訳がない。

私たち市民は微力だが、無力ではない。ムダにムダを重ねる「導水路」を造らせないよう、政治を私物化する「アベ暴走政治ストップ」を願う市民団体の“大きな流れ”の一員として、粘り強く運動を進めていきたい。

# 「木曾川水系連絡導水路」は「長良川河口堰」を閉め続ける 楔

岐阜市民 粕谷 豊樹

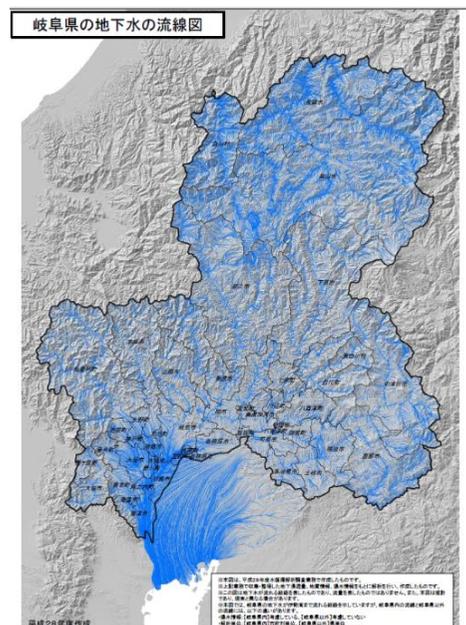
昨年、岐阜県の地質・地層、水環境と温暖化について学ぶ機会があり目から鱗が何枚も落ちました。今、国は徳山ダムの水を揖斐川西平ダムの上流から4mのパイプで繋ぎ長良川と木曾川に流す導水路を計画しています。作る理由は(1)河川環境改善(2)東濃地区の水不足の改善(3)新規利水の供給をあげます。本音は徳山ダムの水を使いたい。河口堰のゲートを上げたくない。公共工事をしたいです。必要の事例として挙げる平六渴水(1994年)は6月から9月までの3か月間で名古屋市内でも水圧の低下は在りましたが断水はありませんでした。長良川でも鵜舟の運航に何ら影響はありませんでした。その後岐阜県は平成26年に東濃西部送水幹線事業を完成させました。目的は事故・地震の対策用ですが水不足の時、多治見を中心に威力を発揮すると思われます。

今後も温暖化は進み平六渴水を上回る水不足は必ず来ます。仮に夏季に6ヶ月間雨が降らない状態が続くと木曾川水系の各河川は枯渇状態となり取水制限も行われます。

平六渴水では木曾川の利水3ダム(牧尾・阿木川・岩屋)は干上がりました。その次は本流にダムの無い長良川が枯れるのでしょうか? 揖斐川水系も徐々に枯れて、徳山ダムも深いが故に水質が悪化し、その原因は解りませんが水温が上がり貧酸素、還元状態となり電気伝導率も桁が違う高さとなり、マンガンイオンも22~23mg/l(水道法では0.05mg/l)となり生活用水としては全くの使用不可となります(平成29年F U委員会報告)。巨費を投じて導水路を作っても使う余地はなく枯れ果てます。

温暖化が進むと表流水だけでは人間は暮らしていけません。どうするか? 活路は地下水との併用です。「水の惑星」と言われる地球ですがその9割以上が海水です。真水・淡水は僅か2,7%です。その中で最も多いのは南極やグリーンランドの氷床で氷になっています。その次に多いのは地下水で水全体の0.66%、河川水に至っては0.0001%です。「地下水の科学」井田徹治によれば地下水は表流水に比べ流れが遅い。表流水は一日数キロ~数十キロ流れ長良川であれば一週間で海まで下ります。地下水は条件によって異なりますが一日数cm~数百mで長いものは600年もかかります。1~2年の渇水に影響されません。

濃尾平野の背後には高い山が連なり地下水も豊富です。岐阜県では上水道、工業用水とも有効に活用しています。高度成長期に過度の使用により地盤も沈下し水量も減りましたが現在では規制強化と使用量の減少により水位、量とも回復しています。2015年の水環境基本計画に基づき岐阜県は「地下浸透量と地下水流動機構の可視化の試み」のプロジェクトも進め概要も掴みました。人類の生存に不可欠な水は表流水と地下水の時間差をコントロールするかが鍵です。それには新たな法律の整備や水系の為の特別な行政区割りなど頭の切り替えも必要となるでしょう。地震・津波・温暖化で加速する河川氾濫など災害大国日本は新たにコロナ禍も加わりました。今、災害対処に必要なのはハードではなく柔軟な考え方と血の通った組織と知性ある統率者です。



岐阜県ホームページ「岐阜県の地下水」より抜粋  
<https://www.pref.gifu.lg.jp/shakai-kiban/jogesuido/mizushigen/11668/tikasuisyoukai.html>

## 河口堰ができて25年。早いものです。

岐阜市 岡久米子

私は、川を分断するような河口堰というものができると聞いた時から、なんとなくいやだなあ！と  
思っていました。組合活動をしている時、岐阜県庁へ河口堰建設反対をハッキリ表明してほしい！と要  
請行動をかけたのですが、まだ河口堰がどんなものか、よく分かっていませんでした。そうこうするうち  
に、河口堰建設に反対する会岐阜に入り、全国的に反対運動が高まる中、まだミーハー気分でしたが野  
田知佑さんたちがリードされるカヌーデモにも参加し、しじみ汁をつくったりしていました。

しかし堰建設は始まり、完成し1995年には河口堰の本格運用が始  
まりました。運動も下火になったある日、導水路というものを造っ  
て、徳山ダムに溜まっている冷たい、汚い水を長良川に放流する計画  
があると聞きました。長良川がますます弱ってしまう……。大切な  
長良川に河口堰を造ることに反対した若い頃の自分に嘘は付けない！  
と導水路事業に反対する、長良川市民学習会の発起の会に出ました。  
あれからもう13年、最近では自分の出来る仕事をもらい全国各地から  
カンパなどで支援して下さるたくさんの方へお礼の手紙を出すこと  
が私の仕事です。皆さんからのカンパだけで長良川市民学習会は活動  
していますので、途切れず支援のカンパを送って下さる方々の熱い  
気持ちを思うと、手は抜けません。私たちの活動は、長良川を、人間  
を含めた生きものを、生きものが過ごす自然を大切にする活動で、決  
して間違っていない！もう若くはないけれど、微力だけど無力では  
ない！これからも自信を持って元気に頑張りたいと思っています。

子供の頃、長良橋と金華橋の中間あたりの、子供の足でも堤防まで10分足らずの魚屋町に住んでい  
ました。魚釣りが大好きだった父に付いて、台風が来た・大雨が降った・と言っては毎日のように川を  
見に行き、日本手ぬぐいでメダカをすくい、初夏にはホタルを見に、真夏の夜には行水、行水といっ  
ては川に浸かるのが我が家の散歩でした。小学生になると上級生と大人の監視のもと、川をロープで仕切  
って泳がせてもらいました。流れに乗ってすごく楽に早く泳げて、選手になれそうな気分でした。こん  
な楽しい思い出いっぱいのある長良川でしたが、河口堰ができてからは様子が変わり、年々息も絶え絶えに  
流れているように思えます。勝手に流筋をまっすぐにされたり、掘り返されたり・・・人工的に変化して  
います。本当の天然アユはいなくなり、小さくなり、サツキマスもいなくなりました。1959年頃利水目  
的で構想された河口堰の水は結局一滴も使われず、なんだかんだと無駄にできちゃった河口堰の言い訳  
に、又導水路が害と無駄を生みながら造られようとしているのです。

### 川はつながって流れてこそ川！ よみがえれ長良川！

開門調査をすれば、塩害が起こるかどうかがわかります。開門して、汽水域が戻れば、よし原は生き  
かえります。皆さんと一緒に見届けたいものですね。

**早く開門調査をしてください！**



2016年「長良川市民学習会ニュース」  
No22の表紙を飾った鮎の絵は、岡久米  
子さんが描いたものです。

## 河口堰閉鎖 25 年に思う-公益とは何？

名古屋市（岐阜出身） 田中 万寿

2011 年 2 月、大村秀章愛知県知事と河村たかし名古屋市長が選挙公約の一つに「長良川河口堰開門調査」を掲げて当選しました。当選後、大村知事は河口堰の検証をする委員会を立ち上げ、堰建設に関わった様々な人からヒアリングを行ないました。中でも、長良川のサツキマス漁師の大橋亮一さんとともに証言された三重県桑名市の赤須賀漁協の組合長・秋田清音さんの言葉は、私には衝撃的でした。この証言を元に、東海テレビは「長良川ド根性」という番組を作成し、赤須賀の漁民の心情が伝えられることになりました。

赤須賀漁協は 450 年もの歴史のある漁協で、漁場である木曾三川の河口域は、かつては日本有数のハマグリやヤマトシジミの産地でした。しかし高度成長期には、上流の工場排水による水質悪化、木曾岬干拓、四日市公害など、様々な開発に翻弄され続け、そこへ河口堰建設問題が起きました。漁民たちは漁協をあげて水上デモをし、上流の長良川 6 漁協と共に建設反対の期成同盟会に加わりました。2 万 6 千人の原告によるいわゆるマンモス訴訟にも参加し、固い反対の意思を示しました。

しかし長良川の 6 漁協が裁判を取り下げ、赤須賀だけが取り残されることになったのです。その後数年間、「いつまで反対しとるのや。小さな漁協のエゴが中京圏の 21 世紀の経済発展を阻害している」とまで言われ、四面楚歌の中、やむなく着工に同意しました。深い挫折感の中、岐阜県の水害防止、あるいは愛知県の水利用の公益にあたることを心の慰めにして、人工干潟でのハマグリ増殖などを若い組合員と共に頑張ってきました。「河口堰の建設を推進していた愛知県や名古屋市が、今更見直す大義は何なのか。公益とは何か、と聞きたい」。これが秋田さんの証言の真意ではないかと私は理解しました。そして、それまで私は長良川上流に住む者の視点からしか河口堰問題を考えてこなかったこと、また下流や伊勢湾などへの影響まで十分に考えが及んでいなかったことを思い知らされ、深く恥じました。

河口堰の建設は、赤須賀漁協が建設を受け入れ 1988 年に工事が始まり、それを契機に、地元中心だった反対運動が「本流にダムのない清流を守ろう」という全国規模の運動になりました。これに対して、かつては堰建設に反対であった岐阜市をはじめ長良川流域の市町村議会が次々に推進決議をし、集会などを繰り広げました。この様子を桑名在住で住民訴訟の原告だった故久徳高文さんは次のように謳いました（「田香風味-久徳高文先生追悼文集」）。

**行政と議会が狎（な）れ合う図式をば 民主社会と 誰 うべなはむ  
伊勢人の生命（いのち）と美濃人の生命とに 何の徑庭あり得べくなし**

ダムや原発建設など多くの公共事業は、経済界の意向を受け国が計画し、最初反対していた地元の議会や市町村も最後は受け入れ、漁師など地元住民は補償金などで諦めさせられ、協力し合うべき住民同士が対立させられ反目し合い不信感が生まれる、というのが多くの構図です。河口堰建設も同じ経過をたどりしました。

漁業関係者の裁判取り下げの後に、最後の砦として 20 名の流域住民が起こした裁判も、提訴から 12 年後、河口堰が完成した 1994 年に岐阜地裁で出た判決は住民側の敗訴でした。判決は「堰は治水・利水を目的とする公共の利益をもたらすもので、環境への影響は環境破壊という程のものではない」というものでした。

25 年間、建設の主目的の工業用水は一滴も使われませんでした。自然環境と地域社会へこれほどの影響を及ぼした事業を見直すことこそ、未来につながる本当の「公共の利益」ではないでしょうか。

伊勢湾の環境を改善し、シジミなどの産地を復活したい。汽水域を回復し、天然遡上鮎をはじめ回遊魚が往き来できる川にしたいー鵜飼のためにも。絶滅寸前のサツキマスを守りたい。本来の自然を生かし、大切な食料や文化を守りたい。そして、流域住民の誇りと信頼関係をとりにどしたいと切に思います。

（元 河口堰差し止め訴訟サポート事務局）



### 出 漁

（磯貝政司 1989 年 2 月 14 日撮影）  
赤須賀漁港から出港するシジミ漁の漁船

# 事務局より

## 訃報

よみがえれ長良川の呼びかけ団体の一つの「中部の環境を考える会」の野呂汎さんが2019年12月2日に逝去されました。89歳でした。原告勝訴となった四日市公害裁判などに弁護士として関わられ、その後1982年の会の創立から、この地区の様々な環境問題を支える活動をずっとされてきました。ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。



## 書籍紹介

**うみはいのち**—石原義剛 海を語る— 編集・発行 公益財団法人 東海水産科学協会

2019年9月30日発行 税込1500円申し込みは海の博物館へ ☎ 0599-32-6006

海の博物館の石原前館長の一周忌に合わせて発行されました。3章構成で1、2章では毎日新聞に寄稿した「海女文化」の連載を。3章では季刊誌「海と人間」に寄稿した、海の博物館開設からはじめられたSOS (Save Our Sea) 運動のこと、四日市公害や水俣病について、芦浜原発反対運動、答志島の漂着ごみ問題など、伊勢湾をはじめとする海の問題について書かれた文を中心に編集されています。

長良川河口堰については、「SOS運動のスタートしたころ、長良川河口周辺の漁民が激しい反対運動を展開していたのですが、わたしたちはその時ほとんど漁民の運動の力になりませんでした。漁民の皆さんを見殺しにし、結果、長良川河口堰の建設を許してしまったこととなります。この20年、SOS運動と「運動」の字を使いながら、運動たりえなかったことに深く反省の思いがつります」と記されています。(SOS No. 121 1992年4月)

石原さんは2016年1月に、四日市で行った第1回「伊勢湾流域圏の再生シンポジウム」で「伊勢湾の環境は今」というテーマで講演されました。そのレジュメが長良川市民学習会のHP (dousui.org) のニュースバックナンバー22号に掲載されています。ぜひお読みください。



**ぎよぶる**—岐阜る。—2020年第9号 企画・編集・発行/NPO法人北九州・漁部(ぎよぶる編集室)

定価1,800円 アクア・トトぎふ内ショップでも販売中  
申し込み: <https://gyobu.thebase.in/items/28355252>

岐阜県(中濃～西濃)エリアの特集です。淡水魚を中心に自然環境、歴史、食文化、人々の元気で豊かな活動が満載。岐阜県は「清流の国」でなく「放流の国」という向井先生の辛口名言?も出てきます。

(主な内容)

- ・スバル-オオサンショウウオと初対面! —岐阜高校自然科学部生物班 岐阜の自然を相手に全力疾走で駆け抜ける高校生と先生たち!
- ・岐阜県の魚たち—岐阜大学地域科学部 向井貴彦
- ・岐阜県の水生昆虫の現状 緋田祐太
- ・環境DNAを用いた生物モニタリング~長良川・揖斐川におけるアユと冷水病菌の解析~ 岐阜高校自然科学部生物班 顧問 矢追雄一
- ・岐阜県南西濃地域の川魚食文化—日比野友亮
- ・笠松トンボ天国に行く 箕浦秀樹
- ・ハリヨ絶滅生息地の記—岐阜協立大学地域創生研究所長 森誠一





「よみがえれ長良川」実行委員会の参加 29 団体を紹介しています。第 9 回は、国連生物多様性の 10 年市民ネットワークさんです。

## 参加団体紹介 9

### 国連生物多様性の 10 年市民ネットワーク

運営委員 三石 朱美

名古屋で世界 193 か国（当時）の加盟国や、様々な国連機関、各地域で活動する NGO や先住民族といった人々一万人が集まり、生物多様性の重要性を確認し、実現するための方策を議論した生物多様性条約 COP10 は 2010 年のこと。それから、10 年が経ちました。COP10 が開かれたとき、日本の NGO の提案をうけて、2011 年から 2020 年までの 10 年間は重点的に生物多様性の課題に取り組むことが国連総会で議決されました。これが「国連生物多様性の 10 年（UNDB）」です。国連生物多様性の 10 年（UNDB）市民ネットワークは、こうした COP10 の成果を市民の立場で引き継ごうということで、2011 年、結成されました。

生物多様性の損失を止めるための活動には、多様な方法があるので、UNDB 市民ネットワークでは、テーマごとにグループを分けてそれぞれ活動しています。特に、COP10 開催だった中部地方では、木曾三川から伊勢湾、三河湾を経て太平洋へとつらなる「流域」での活動に着目し、開催地を変えて年一回のシンポジウムを行ったりしています。

2020 年の今年、愛知目標の達成度を確認し、課題を整理し、これから取り組むべき新たな目標を決める重要な一年でした。コロナ禍を経て、人間は感染症とどのように向き合うのか、人の移動や交流がより一層大きく、深くなった現在、国や制度を超えて、地球環境の保全に取り組むために必要なコミュニケーションや政策のあり方とはどういうものか、など、2010 年にはあまり意識されていなかった課題も浮かび上がってきました。愛知目標の見直しは、インターネット通信など積極的に使いながら、現在ますます深まっています。団体としては、新しい目標ができるまでを活動期間と定めていますが、世界の議論と地域の実践をつなぐべく、引き続き活動を続けていきたいと考えています。



## お願いとお知らせ

◆ 今回は「河口堰閉鎖 25 年」を特集しましたが、次号（11 月頃発行予定）でも引き続き皆様からの原稿を掲載したいと考えております。河口堰閉鎖 25 年に向けた思い、エピソード、開門をめざす決意、振り返って思うこと等を綴ってください。タイトルや文章、詩、俳句など形式は自由です。どなたでも寄稿できます。おひとり A4 サイズ 1 ページ以内でお願いします。寄稿の要領は、長良川市民学習会のホームページをご覧ください。

◆ 後藤宮子さんの回遊魚の絵入りの「よみがえれ長良川」のリーフレット・2020 年改訂版（無料）を皆さんのお知り合いの方に広めていただけませんか。また、置いていただけるお店などを紹介していただけませんか。多くの市民の皆さんに現在の長良川を知っていただきたいと願っています。どうぞよろしくお願いいたします。

◆ 前号のニュース 31 号 P. 12 に誤植がありました。訂正をお願いします。

関市西部地区で武芸川と津保川そして長良川が一本の流れになります。→ 武儀川（正）



# 長良川河口堰閉鎖からの足跡 25年の年表

長良川河口堰関連の詳しい年表は、長良川市民学習会ホームページの「河口堰問題 年表と資料」  
[http://dousui.org/dataroom/pdf/20150705\\_nagara-history.pdf](http://dousui.org/dataroom/pdf/20150705_nagara-history.pdf) をご覧ください。

1995年 7月6日 長良川河口堰全ゲートが降ろされて運用開始

12月 徳山ダム事業審議会開始

1997年 3月 河川法改正

4月 諫早干拓潮受け堤防締切決行（ギロチン）

1998年 4月 愛知県知多地域、三重県中勢へ導水開始

1998年 9月 河口堰公金支出差止請求住民訴訟（愛知県）

1999年 1月 藤前干潟の埋め立て計画中止

2月 河口堰公金支出差止請求住民訴訟（三重県）

3月 徳山ダム住民訴訟始まる

2000年 1月 吉野川第十堰建設住民投票「123」運動

2007年 7月 木曾川水系連絡導水路計画公表

9月 設楽ダム住民訴訟始まる

**12月 長良川に徳山ダムの水は要らない！**

**「長良川市民学習会」発足**

2009年 5月 河村名古屋市長「導水路撤退」表明

6月 愛知県「導水路住民訴訟」始まる

9月 国交大臣木曾川導水路事業「凍結」表明

2010年 6月 市民による「豊かな海づくり大会」開催

10月 生物多様性国際条約 COP10 交流フェアに参加

12月 諫早湾排水門「開放を命じる判決」確定

2011年 3月 東日本大震災

4月 河口堰の「更なる弾力的運用」始まる

6月 愛知県の「長良川河口堰検証」始まる

12月 「よみがえれ長良川、よみがえれ伊勢湾！」

シンポに大村知事・河村市長が登壇挨拶

2012年 6月 韓国4大河川事業視察・韓国との交流始まる

2013年 9月 長崎県・石木ダム建設事業認定

2015年 7月 閉鎖20年「よみがえれ長良川」シンポ&トーク

12月 「清流長良川の鮎」が世界農業遺産に認定

2016年 5月 導水路住民訴訟に最高裁上告棄却決定

10月 釜山市役所訪問・洛東江河口堰視察

2017年 12月 2017 開門シンポジウム（長良川国際会議場）

2018年 3月 荒瀬ダム撤去工事完了

2019年 6月 韓国・洛東江河口堰「開門調査」始まる

2020年 4月 新型コロナウイルス緊急事態宣言発出

2010年10月16日 岐阜新聞



↑ 写真上：大村知事へ長良川河口堰検証プロジェクトチームの小島座長から同プロジェクトチームの報告書を提出 2012年1月

写真下：第9回愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会 2014年6月3日 愛知県ホームページより

「166キロの清流を取り戻すために」P14 抜粋



2016/10/9 プサンにて 市民・漁民と交流

---

---

**発行：長良川市民学習会** <http://dousui.org/>

代 表：粕谷志郎

連絡先：武藤 仁／090-1284-1298

〒500-8211 岐阜市日野東 7-11-1

[mutohitoshi@yahoo.co.jp](mailto:mutohitoshi@yahoo.co.jp)



私たちの活動は皆様のカンパで成り立っています。  
賛同してくださる方は、ぜひカンパをお願いします。

ゆうちょ銀行口座：00840-3-158403

口座名称：長良川市民学習会

---

---

本ニュースのバックナンバーは <http://dousui.org/news/index.html> でご覧になれます。